

観光文化

Tourism & Culture

211

January 2012

特集◎日本の森のエネルギー

— 森づくり、森の文化と観光

◆巻頭言

いのちを守る森づくり

— 災害の瓦礫がれきを使って観光資源にもなる“森の万里の長城”づくり 宮脇 昭……①

◆特集

・森と山への信仰を取り戻す 安田 喜憲……②

・自然、森と人間の関係

— 群馬県上野村に暮らして見えてくるもの 内山 節……⑦

・百年の交流、千年の森づくり「ドングリの森小学校」

— 長野県飯田市での『ふるさとの森構想』実現と継続から見えるもの 井上 弘司……⑪

・癒しの森®長野県信濃町

— 豊かな自然と森が包み込む力が人びとのところとからだを元気にする 松木 重博……⑬

・白神山地の恵みを活かすエコツーリズムの推進

— 白神山地の保全と活用に向け動き出した“環白神”地域の取り組みから 大隅 一志／吉谷地 裕……⑲

◇研究ノート 三陸の観光復興

— 岩手県田野畑村の取り組み (3) 大隅 一志……⑳

◆連載

I あの町この町 第47回

真宗王国 — 三重県津市一身田寺内町 池内 紀……㉓

II ホスピタリティーの手触り 68

「幸せの国」の観光政策 山口 由美……㉖

◆新着図書紹介……㉞



—— 浄土庭園の舟・毛越寺 ——

東日本大震災はみちのくに多大な被害をもたらした。それでも復興に立ち上がる人々の姿に接し感動を覚える。比較的被害が少なかった奥州藤原三代の『黄色の里』と呼ばれる岩手県平泉町を訪ねたのは九月中旬である。

文化遺産に彩られた中尊寺金色堂や毛越寺^{もつし}周辺は観光客でごった返していた。金色堂近くの土産物屋の店員は「アジア圏の外国人ツアー客や修学旅行生たちの激減で途方に暮れていた」と語ったが、六月下旬に「平泉」が世界文化遺産に登録後は人出は四割増加し観光客が絶えない賑わいを見せていて、ほっとした。

写真は毛越寺を美しく映す大泉が池を中心とする極楽浄土を模した「浄土庭園」であるが、藤原氏二代基衡^{もとむら}が造営を始め、三代秀衡^{ひでむら}が完成させたと伝えられる。庭園は後方の塔山を背景に洲浜^{すはま}や築山^{つきやま}、出島、飛島などの石組みが見事に配され、美しい光景を醸し出す。小舟が未来を照らす希望の舟出となるよっ心より願わずにはいられない。

(写真・文 樋口健二)

二〇二一年三月十一日。東北地方を千年に一度といわれる大震災が襲い、一瞬にして二万人近い人のいのちを奪っていった。今や私たちは物もエネルギーも、かつて人類が夢にも描けなかつたほど豊かで、また最高の技術を持ち、地震国日本では災害に対しても十分な対応をやっていたはずである。しかし私たちの予測の範囲を超えて、地中海岸国定公園地域の海岸沿いの港も病院も観光ホテルもあつとやう間に流され、廃墟と化した。私たちはこの不幸な現状をただ悲しむだけではなく、かつて人類が五百万年の地球上のいのちの歴史でおそらく何百回以上もあつたであろう地域から地球規模の大変動に耐えて生き延び、発展してきた実績を踏まえ、再び襲うであろう自然災害に耐える、いのちの森を未来に向かって今すぐできることからつくることが重要である。

災害に耐える森は地球温暖化の原因となるカーボンの固定にも役立つ。瓦礫を莫大な予算をかけて焼いて、地球温暖化を助長するよりも、生き延びた人たちの思いが詰まった瓦礫のなかで利用できるものは使う。毒は排除する。しかし九〇%以上は廃木、廃材など木質瓦礫であり、地球資源である。この地球資源を土と混ぜてほつこらとマウンドを築き、その上に生態学的な調査を基にして決定したタブノキ、シイ、カシ類などの樹種を選定し、みんなで植樹する。生態学的な本物の森はいのちを守る。そして本物の防災・環境保全林を南北三百キロつくる。年

いのちを守る森づくり

～災害の瓦礫がれきを使って観光資源にもなる“森の万里の長城”づくり～

横浜国立大学名誉教授／財団法人 地球環境戦略研究機関 国際生態学センター長

宮脇 昭

月がたてば個体の交代はあるが、森のシステムとしては次の氷河期まで九千年持つ森は、再び襲うであろう地震、大津波、台風、大火にもいのちを守る防災機能を果たす。また地球規模ではカーボンを固定してCO₂削減に寄与する。三百グラムの根群が充滿したポット苗をタブノキ、シイ、カシ類を中心に植えて、大きくなって、例えば乾燥重量が二トンだとして、その五〇%は温暖化の元凶のカーボンである。土地本来の主木群を中心に多くのその森の構成樹種を混植して生物多様性を維持する。

同時に森のなかに避難路の機能を持った小道をつくれば南北三百キロ続く自然遊歩道になる。環境省の南川秀樹事務次官らが共鳴してくださっている世界に誇る「三陸復興国立公園」として二一世紀のいのちの森をつくる。地域固有の森は世界に誇る観光資源としてアピールできる。内外から多くの観光客が訪れ、危機をチャンスにつくられた世界で初めての、森の万里の長城を見習い、学び、さらに癒やし、憩いの場となるであろう。

新年にあたり、昨年の不幸な危機をチャンスに変え、前向きにいのちの森をつくらう。私たちのいのちを守るため、世界に誇る観光資源として今すぐどこでもできるところから。今年こそ足元から確実ないのちの森、九千年残る、二一世紀の森の万里の長城をつくらう。いいことはないか。

(みやわき あきら)

日本の森のエネルギー

森づくり、森の文化と観光

昨年二〇一二年は国際森林年で、国内でも国民一人ひとりが森林の重要性について考える機会が多くありました。日本の国土の六割以上を占める森林は、現在も日本人の生活、文化に大きな影響を及ぼしています。今号は、森の文化に精通された方々と、森と文明、自然と森と人間の関係、体験交流などの視点から、森との共生による魅力ある地域づくりやツーリズムの可能性について考えます。

森と山への信仰を取り戻す

国際日本文化研究センター教授

安田 喜憲

縄文文明

『観光文化209号』で近藤誠一文化庁長官が「古代以来の日本国の奥に、縄文文明という別の日本が重層的に存在することが垣間見えてくる。」と述べておられる。

「縄文は文明だ」というのが私（拙著『縄文文明の環境』吉川弘文館）の長年の主張であるが、日本の考古学界では「縄文を文明というのはけしからん」というのが通説である。

しかし、これは第二次世界大戦後の欧米の物質エネルギー文明に毒された文明論に立脚した縄文の見方である。

確かに梅棹忠夫氏は、文明は制度・装置系などのハードな部分を指す（『梅棹忠夫著作集』中央公論社）。伊東俊太郎氏も文明は「移動可能なハードなもので、その内核にある精神的なものは文化だと区別した」（『伊東俊太郎著作集』麗澤大学出版会）。我々もこの二人の巨人の文明の見方に追随し、「都市が

あり、金属器があり文字があることが、文明の基本要素」だと、文明の持つ物質的きらびやかさを尺度として文明論を展開してきた。このため「縄文のどこに都市があり金属器がある。貧弱な物質的世界の縄文を文明だ」という安田の説は狂気の沙汰だ」とまで批判された。

ところがcivilisationを文明と訳した福澤諭吉は「文明論とは精神発達の議論なり」と『文明論之概略』（岩波文庫）のなかで喝破し

ているのである。

文明には精神がある。その文明の精神の重要性に今こそ目覚める時なのである。文明の精神という視点から見れば、縄文は文明としての資格を十分に有している。物質的きらびやかさはなくとも、縄文の精神は二世紀の新たな文明の時代を構築する資格を有している。

3・11の東日本大震災で、被災された東北の人々が世界を驚嘆させた気高い心とその振る舞いは、東北の美しい風土との関わりにおいて、人々が縄文時代以来一万年以上にわたって築き上げてきた心である。

近藤長官は「東北は今、歴史上初めて世界の表舞台に立っている。東北の復興は単に東北だけの復興ではない。それは人類の再生につながるものとならねばならない。」とも述べておられる。まさにそのとおりである。

日本の文化をリードする立場にある文化庁長官に、このような思想の持ち主がなられたことを私は歓迎したい。

生命文明の時代を構築する

今、私が目指しているのは、生命文明の時代（拙著『生命文明の世紀へ』第三文明社）を、この縄文文明の伝統を色濃く残した東北の大地に構築することである。

私はこれまで企業・官僚・学者そして第一次産業従事者らの産官学の研究者の連携によって、生命文明の時代を実現するために、国際日本文化研究センターで産官学の共同研究を過去九年間開催してきた。またNPO法人「ものづくり生命文明機構」を立ち上げ、社会的活動によって、その具体的実現化にも取り組んできた。

「こんな時にシンポジウムとは何だ！」という批判を振り切つて、東日本大震災直後の四月三十日には、真つ先に気仙沼で復興支援シンポジウムを開催し、新たな東北の未来像として生命文明の時代を提案した（拙著『文明の原理を問う』麗澤大学出版会）。

現在では多くのシンポジウムが企画されているが、おそらくこのシンポジウムが最も早い復興への第一歩のシンポジウムであったと思う。今では森里海の連環に立脚した東北の沿岸漁業復興のシンボルとなっているは行のよび畠山重篤氏を、サポートする大きな契機になったと思う。全国から九十名以上の参加があった。

さらにまだショックから立ち上がれない多くの東北大学の友人たちに声をかけ、「新たな災害対策の研究所を立ち上げる時だ」「今こそ東北大学が地域の中心となって立ち上がる時だ」と声援を送り続けてきた。京セラ稲

盛財団にお願いしてボランティアの支援事業も実施してきた。

今は東北大学をはじめとする大学が、未来の新たな世界の構築に向けて、明白なビジョンを提示し、地域の中核として復興をどのようにリードしていくかが問われている時であると思う。そのためには全国の、いや世界の叡智えいちを結集し、未来を担う若者の教育にあたるべきであると思うのは、私一人の思いだけではあるまい。

東北大学大学院環境科学研究科の集中講義・環境文明論やそれ以外の大学での集中講義は、多くの学生が聴講し人気を博した。私の授業は学生にも人気があり、未来を担う学生の教育にも熱心に取り組んできた。私の弟子のなかには、三十九歳の若さでイギリスのニューカッスル大学の教授になる者まで現れている。現在進行中の文部科学省新学術領域「環太平洋の環境文明史」は私が発案し、その指導の下で若い研究者がアンデス文明やマヤ文明の研究に取り組んでいるプロジェクトである。

千年に一度の大震災の復興ビジョンを立てることができるのは、千年に一人の真の天才しかない。

しかし、そうした最澄や空海のような天才

が、東北の大地から出現している兆しはまだ見えない。

日本政府も誠に遅まきながら復興庁を立ち上げるが、はたして東北の有効な復興政策を提示できるかどうかはまだまだ未知数である。

新たな生命文明の時代を東北の大地に構築する必要がある。そのためには、全国、いや全世界の叡智を東北の大地に結集し、復興ビジョンの構築と実施、そして未来を担う人材を育成することである。

仙台での学生時代は楽しかった。その思い出の東北の地に帰り、あの東北の風土の輝きと人々の自信と誇りを取り戻し、そこに新たな生命文明の時代を構築するのが、今の私の夢であり理想である。新たな文明の潮流をこの東北の大地から発信することこそが、今こそ必要なことである。

生命文明を構築する観光

東北には素晴らしい聖なる山と鎮守の森がある。その森は縄文文明と稲作漁撈文明（拙著『稲作漁撈文明』雄山閣）の心を伝えるものである。日本人はその森と山と鎮守の森に接することで、元気を回復し、新たな生命文明の時代を構築する心が醸成される。

東北のブナの森が今日のように形成された

のは、九千年前に対馬暖流が日本海に流入しからである。雪が多くなり多雪の風土に適応したブナ林が拡大できたのである。私が訪ねて感動した対馬暖流沿いの日本海沿岸の森を北から順に紹介したい。

1. 北海道の函館山と縄文遺跡群

函館の町を一望できる小高い丘（写真1）。その丘からは函館の町は言うに及ばず、津軽海峡から本州も見える。夜景が絶景である。山には天然のブナの森が生育する。北海道の



写真1 函館山から見下ろした函館湾

ブナの森は、およそ七千年前に本州から渡島半島に到達した。そして黒松内低地にまで拡大した。その北海道に最初にたどり着いたブナの森の中で、縄文文化が開いた。青森県三内丸山遺跡は有名だが、北海道に縄文時代の遺跡があるなどとは、皆さんもご存じないだろう。ところが近年、噴火湾沿岸を中心にして、巨大な縄文時代の遺跡が次々と発見されたのである。南茅部遺跡群は青森県三内丸山遺跡に匹敵する巨大なものである。カリンバ遺跡（写真2）からは縄文時代の漆塗りの真つ赤な櫛も発見された。函館市には道の駅に接して縄文文化交流センターもオープンした。北海道の縄文と森の文化をまず味わっていただきたい。



写真2 カリンバ遺跡の縄文時代中期の土器

北海道にも縄文時代の文化が繁栄していた

2. 青森県^{あおもり}鳶温泉と三内丸山遺跡

八甲田山の鳶温泉のブナ林には、新緑の五月に行くと、この世のものとは思えない美しい世界が広がっている。鳶温泉の湯は透明な透き通ったブナの森からあふれ出るお湯である。ブナの森を散歩しそのお湯に漬かって疲れを取れば、この世の極楽である。奥入瀬渓谷にアメリカ人の友人の奥さまを案内した時、彼女は「こんな素晴らしい紅葉は見たことがない」と言った。私はすかさず、「あなたたちのご先祖が来るまでは、アメリカの国土はこの何十倍も美しい森で覆われていたのですよ。それをみんな、あなた方の先祖が破壊したのです」と答えた。彼女は詩人だった。日本人がカメラを構えて写真を撮る姿を見て「ピストルを構えているのではないかと思っただ」と詩に書いていた。アメリカ人の心はここまで病んでいるのである。それはこんなに美しい森を全て破壊し尽くした報いであると思はれる。裾野に広がる青森平野の三内丸山遺跡を併せて見学され、できれば岩木山神社まで足を運ばれば、東北の森と水の循環系を守った縄文文明と稲作漁撈文明の素晴らしさが堪能できる。

3. 秋田県^{あきた}男鹿半島と菅江真澄^{すがえますすみ}

男鹿半島は「なまはげ」の里である（写真

3）。なまはげは年の暮れに真山からやってきて、怠け者を懲らしめ、他人に悪いことをする人を懲らしめる。そのなまはげの行事は、欲望をコントロールする東北人の心を形成するうえで大きな役割を果たしてきた。

この男鹿半島の風土に強くひかれたのは、江戸時代後半に東北を旅した菅江真澄である。菅江真澄は、愛知県の三河に一七五四年（宝暦四年）に生まれた。彼は一七八三年（天明三年）三月から一七八四年（天明四年）七



写真3 なまはげは年の暮れに真山から下りてくる

写真提供：秋田県

月にかけては、信濃から越後を旅し、続くと一七八四年九月から一七八八年（天明八年）七月にかけては、出羽から陸奥を旅した。一七八八年七月には北海道に渡り、一七九二年（寛政四年）十月まで渡島半島南部を旅した。一七九二年十月から一七九五年（寛政七年）三月までは、下北半島に滞在し、一七九五年三月から一八〇一年（享和元年）十一月まで弘前に滞在した。そして一八〇一年十一月から一八二九年（文政十二年）七月十九日に死ぬまで、実に二十八年間も秋田に滞在したのである。菅江真澄は東北の風土をこよなく愛し、東北から蝦夷地の記録を日記と絵として残した。

こうした菅江真澄の旅を可能としたものは、何だったのだろうか。

秋田県立博物館の松山修氏は、それを可能としたものは、人に見せるための日記を残す旅人の気質、地方の知識者層の歌を愛する歌人の集団の庇護、そして本草学の知識に基づく薬師としての能力ではなかったかと指摘されている。

点々と東北の住居を変え、定まった収入もなく、一七八四年から死ぬ一八二九年まで四十五年の間、次々と居住地を移動しながら旅に明け暮れることができた背景には、日



写真4 男鹿半島の二ノ目潟と日本海

本人の旅人をもてなす心と、人を信じる心、そして文化を大切に、知識者を敬う心があつたからではないかと思つている。カメラを構えていてもそれをピストルだと思つアメリカ人の心と日本人の心は根本的に違う。それは人を信じることができるかどうかである。人を信じる心は自然を信じる心から生まれてくる。森を守つた日本人は人を信じることができ、旅を楽しむことができるのである。

菅江真澄は男鹿半島の詳細なスケッチを記録している。

男鹿半島には一ノ目潟・二ノ目潟・三ノ目

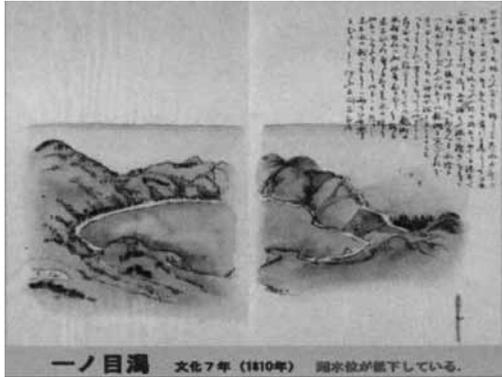


写真5 菅江真澄が描いた1810年の湖岸は広く水位が低下していたことを示し、年縞の分析による降水量が低下したという気候変動の復元結果と一致した

潟という火山湖があり(写真4)、その湖底には、私が今研究している年縞が堆積している。年縞は気候変動や環境変動を年単位で記録している地球の遺伝子である。私たちが年縞で当時の環境を復元した結果と、真澄の残したスケッチの記録は見事に対応した(写真5)。

それにしても男鹿温泉の湯質は最高だった。男鹿温泉雄山閣のご主人は菅江真澄の研究に没頭され、旅館の中にも貴重な真澄の資料を展示されている。

4. 山形県羽黒山の森と山岳信仰

沖縄出身でハーバード大学の学長補佐をし



写真6 羽黒山神社への杉並木

ている若い女性は、羽黒山を訪れた時に涙ぐんでいた。「こんな感動は生まれて初めてでした」と言う。羽黒山神社に上る石段の両脇には美しい杉並木がある(写真6)。杉木立の中を一段一段踏みしめて登る間に、いつの間にか羽黒山神社の靈気に包まれた世界に入つていく自分を感じる。この羽黒山神社は山伏の神社である。明治の廃仏毀釈はいぶつきしやくによって、日本の山岳信仰は壊滅的打撃を受けた。そうしたなかで、東北の人々は日本人の心の原点である山岳信仰を守り通してきた。山伏に案内されて山岳信仰のさわりを体験するのも最高の観光になるだろう。山の靈気を体いっばいに吸い込んで、明日からの生きる力を獲得する。それができるのは東北の大地しかない。

(やすだ よしのり)

自然、森と人間の関係

群馬県上野村に暮らして見えてくるもの

哲学者
立教大学教授

内山 節

かつて人々は森のことを「山」と呼んでいた。私の生まれた東京の世田谷には、子供ころには転々と雑木林が残っていた。その雑

木林は、元々は畑に入れる堆肥の原料として落ち葉を集める林であり薪や山菜を採る場所だったのだけれど、当時はほとんど利用されなくなっていて、そこは子供たちの格好の遊び場だった。江戸期からの武蔵野の農業は、雑木林とともに展開したのである。

山は、いろいろな役目を果たす場所

雑木林に行く時、昔からこの地で農業を営んでいた人たちは、「山に行く」という言葉を使っていた。雑木林は平地林だから、山のように高くなっているわけではない。しかし山とは、土地が盛り上がっている所ではなく、森のある所のことだったのである。この言葉の使い方は全国的に同じで、後に私が暮らす

ようになる群馬県の上野村でも、村人が森という言葉を使うようになるのは最近のことである。

その上野村の「山」はいろいろな役目を果たす場所だった。第一に燃料としての薪を採る場所であり、さらに落ち葉を生み出す所でもあった。ここでも落ち葉は堆肥の材料である。山菜やキノコを採りに行くのも「山」であり、冬には「山」に行つて猟をすることもあった。「山」を流れる川では魚が捕れ、時に人々は薬草を採りに「山」に入った。以前に上野村の人たちと調べた結果によれば、村人たちが普段使っていた薬草には三十種類くらいのものがあり、さらに特殊な病気の時に使う薬草が二十種類くらい、また体力が落ちた時などに用いる強壮剤としての薬草が五十種類くらいあったから、人々は「山」から百種類くらいの薬草を入手していたことになる。

山は生活の場、信仰の場

さらには炭焼きや木材の出荷をも含めて、「山」は生活と多様に、深く結ばれた場所であり、とともに、その「山」は信仰の場でもあった。

上野村の「山」のなかには、確認されているだけでも五百体もの石仏が安置されている。それは村の人たちが願いを込めて祀ったもので、おそらく千体くらいの石仏が「山」のなかには眠っているだろうと村人は言う。石仏以外で一番多く祀られているのは山の神である。山の神は仏像のようなものを持たない、いわばかたちのない神であり、多くは岩の下などに祀られている。その数も村全体では二、三百はありそうな気がするし、竜神、弁財天、不動明王などの石仏として祀られている水神も村には多い。他にも神として祀ら

れている大岩や山の頂、さらには「山」のなかの大木などもあって、村人の数より神仏の数が多いくらいである。

今でもその気風は残っているけれど、昔の人々にとって、「山」は神聖な場所であり、畏敬の対象であった。年寄りたちに聞くと、昭和二十年代くらいまでは、「山」に入つて修行をする人も結構いたらしい。

ところでこんなふうに見ていくと、今日私たちにちよつと不思議な気がする。一面では「山」は生活と結んだ場所であった。ここでは狩猟もすれば、伐採も、採取もする。木を植えて育てて林業をし、一九六〇年くらいまでは炭焼きも盛んだった。そんなふうには「山」と結んでいるのに、他面では「山」は聖地であり、信仰の場所なのである。神聖な場所なら猟をしたり、伐採をするようなこと



「山」の石仏

は控えそうなものだが、それらのことも行われていた。とするとこの二つの面は、どんなふう調整されていたのだろうか。

住む人の生活のなかにある山

伝統的な日本の社会では、信仰は生活のなかに深く根を下ろしていた。私の家の近くで暮らしていたAさんは、かつては炭焼きを主たる生業として暮らしていた。腕のよい炭焼きだったらしく、その収入で二人の子供を大学に送っている。生きていけば九十代後半の人で、Aさんは朝起きると神棚に向かつてまづ般若心経をあげるのが日課だった。伝統的な民衆信仰では神仏習合が普通だから、神様に般若心経をあげたとしても少しも不思議ではない。熱心な山岳信仰の行者でもあった。

時々「山」に入つて身を清め、普段は温和な村人であった。炭焼きだっただけに「山」のことは何でもよく知っていて、私はずいぶんいろんなことを教わった。私が炭焼きの方法を教わったのもAさんからである。

偉大なる自然があるから、村の暮らしがあがり、自分たちの生きる世界が生まれる。だから自然とともに村で暮らすことは、絶えず偉大なる自然を感じることもあり、その自然に感謝することでもある。霊山でもある「山」

は生活の外にあるのではなく、生活のなかに存在している。

人々が自然とともに 生きようとするわけ

日本の伝統的な自然信仰は、単なる自然の崇拜ではない。出発点に「人間であること」への悲しさがある。人間は自我を持って生まれる。「自分」を持っている、「私」を持っている、「自己」を持っているといつてもよい。「自分」が生じてくる。それを実現させようとして、ついには人と争い、無駄なものを蓄え、時には他者を蹴落したりする。ヨーロッパの哲学は、人間は「自己」を持っているから向上しようとし、目的を遂げようとして文明を發展させていくというように「自分」のあることを肯定的にとらえるが、日本の伝統的な思想は、そんなものがあるから表面的な欲望にとらわれて、大事なことを忘れるようになっていくと考えてきた。といつても、それでもなお「自分」を持っているのが人間である。そんな人間の在り方を、人々は「人間とは悲しい存在」ととらえた。そして人間の根本的な生のなかに内在する悲しさを見つめれば見つめるほど、「自我」を持つことなく、お

のずからそのままに生きている自然に真理の体現を見た。自然は真理の現れであり、それ故に神であった。伝統的な社会の人々は、自然に生活上の有効性があるから自然とともに暮らしたのではなく、自然に体現された真理に畏敬の念を抱きながら、それゆえ自然とともに生きようとしたのである。

自然・森の潜在的な力

今日の自然のとらえ方は、自然の機能に偏りすぎているという気がする。例えば森を見れば、今日の理論は、森は保水機能を持つているとか、CO₂を固定する機能があるとか、木材は再生可能エネルギーだというように、その機能面から森の価値をとらえようとす。もちろんそれらも事実なのだけれど、機能面からとらえるだけなら、その機能に重要性がなくなれば森の価値までもが低下することになる。実際高度成長期の日本は、自然の価値より、自然を人工的な空間に変えることよって得られるものの方に大きな価値を見いだしていたのであり、その結果自然は次々に壊されていった。さらに機能という面からとらえれば、次のようなこともある。

自然は人間たちにさまざまな恵みを与え。しかしその自然は時に災いをももたらす。

東日本大震災の地震、津波は、禍わざいとしての自然の力を私たちにまざまざと見せつけた。台風や嵐、噴火、洪水、山腹崩壊……。そのような面を持つているのも自然の機能である。日本の自然は「荒ぶる自然」でもあった。ところがこの恵みと禍は、必ずしも二項対立的にとらえられるものでもなかった。時に洪水を起すほどの雨が降るから、稲作農業が成り立つ。地崩れを起こした場所は、後に豊かな土壌を持つ農地に生まれ変わることができ。禍と恵みは紙一重であるばかりでなく、禍が恵みの元を作ることもしばしばである。だからこのような風土に暮らしていた人々の自然を見る目は、機能という視点では複雑であった。

日本人の自然観

とすると、自然は人間に対してプラスの機能を持つだけではないのだから、自然とともに生きることを放棄してもよかったはずである。伝統的なヨーロッパの自然観のように、野生の自然を恐怖の場所としてとらえ、自然を悪魔の住む場所と見なしてもよかったはずである。

だが日本の自然観はそういうものではなかった。人々は自然に畏敬の念を抱き、自然と



トチの巨木

ともに生きることに価値を見いだし続けた。それを可能にしたのは、自然の姿に真理の体現を見いだした、人々の思いである。

上野村の「山」のなかを歩いていると、時々驚くような大木に出会うことがある。樹種で一番多いのはトチで、ミズナラやケヤキのこともある。私の知る限りの最大の大木は、一本の木で千平米の土地を占有していて、「山」の主の風貌ふうぼうを備えている。

それらの木は全て切らずに残されたもので、切られなかった理由は、それが山の神の休憩する木だったからである。「山」のなかには所々に山の神の休憩する木があって、そういう木は、たとえ一何百万円かで売れる木であったとしても、今でも林業者たちは決して切らない。村の人間なら、一目見れば山の神の休憩する木はすぐ分かる。

と言っても本当に山の神がいるのかと問わ

れたら、村人たちは苦笑するしかないだろう。もちろんいくらかの伝承はあるけれど、それらが真実かどうかなどは村人にとってはどうでもよいことなのである。「山」は山の神が守っているという昔からの言い伝えを大事にしながら生きることが、村で暮らしていると忘れてはいけないことのように思えてくるだけである。山の神とともに暮らしてきた歴史を捨ててはいけないのだという気持ちが、村では共有されている。

自然とともに生きるための作法

春になると日のよく当たるところに山ウドが出てくる。山ウドは一つの根から数本の芽が出てくる植物で、村人は山ウド採りをする時は、一番大きな芽を残し、他の芽を採取する。そうしておけば山ウドの生命力が低下することはない。全てを採ってしまうと山ウドは弱ってしまう。人間の欲望が自然の生命力を低下させてはいけないというのも村人の作法である。

こんなふう自然とともに生きた人々の世界には、日々の生活や労働の隅々にまでいろいろな作法がある。そしてこれらの行為のなかに日本の自然信仰があり、この精神が自然と人間の共存を可能にさせてきた。絶えず人

間の存在の悲しさを見つめながら、それ故に自然の偉大さを感じる精神が、である。

だから今村人は怒っている。言うまでもなく原発事故に対してである。原発事故は自然を放射性物質で汚染させてしまった。尊敬すべき自然を、取り返しのつかないかたちで人間の欲望が汚してしまったのである。村人にとっては人間の健康問題より、自然を汚したことが重大である。

上野村の自然と

人間がつくる世界の美しさ

四十年ほど前に初めて上野村を訪れた時、私は村の美しさに驚いた。山のおもとは美しく耕された畑があった。その上にはよく手入れされた森が広がっていた。谷底を神流川が流れ、透き通った水が変化に富んだ川をつくり出していた。そのころ村には舗装道路はなかったけれど、くぼみは村人の手で修理されていて、デコボコのない土の道が家々をつないでいた。栗の木の板で屋根を葺いた家が多く、障子窓が自然のなかで白く浮き上がっていた。その家からは夕方になると煙が立ち上った。それが一日の終わりの近づいていることを教えた。自然だけが展開している世界より、自然と人間によってつくられている世

界の方が美しいことを、この時私は知った。

それからは私は村での長期滞在を繰り返すようになった。村で暮らす場所が欲しいという私の願いに応えようと、村人が家を探してくれた。畑も、裏山も付いていて、私には文句のない家だった。ここで私は東京と村とを行き来しながら暮らすようになる。こうして旅人として訪れていた自然の世界が、もう一つの私の暮らしの場になった。春、夏、秋、冬と表情を変えていく自然はいつでも無条件で私を受け入れ、私はその懐の深さに感謝した。

集落の水道の水源は、山の中腹にある湧き水で、そこには水神様の不動明王が祀られている。その水を集落まで引いたところに、やはり水神様として弁財天が安置され、山の入り口には山の神が祀られている。先日登った「山」の頂にはこの山の神様が祀られ、山頂への道の途中には地藏様が置かれている。この地藏様は以前は雨乞いの時に人々の背中に背負われた。

こんな村人の精神の世界がつくり出した美しい自然が、四十年ほど前に訪れた私を驚かせ、そして私を迎え入れた。

(うちやま たかし)

写真提供…群馬県上野村役場

百年の交流、千年の森づくり「ドングリの森小学校」

——長野県飯田市での『ふるさとの森構想』実現と継続から見えるもの

しんきん南信州地域研究所

主席研究員

井上 弘司

ドングリの森小学校とは

事の始まりは渋谷区立中幡なかはた小学校校長であった杉原五雄いっお氏の「ドングリの苗木を育てて故郷の森づくり」という一枚のメモからでした。そこには『学校で育てたドングリの苗木を六年生が、地方に持っていき植樹する。子供たちは、自分の育てたドングリの苗木の成長を楽しみにするだろうし、小学校時代の思い出として、いつまでも心に残るだろう。また、時にはドングリの苗木に会いに、出かけるのではないだろうか。これが「ふるさとの森構想』である。』と書かれていたのです。

杉原校長は当時、飯田市商業観光課で仕掛けた「体験教育旅行」の視察に訪れており、教育旅行の担当であった竹前雅夫氏（現工業課長）が縁をつないでいました。件のメモはその竹前氏が所持しており「こんなことを考

えている小学校校長がいて、近くの公園で拾ったドング리를校長室で発芽させており、できればどこかの山にそのドング리를植樹したいと考えている」との話を聞いたのです。かねてより針葉樹だけでなく地域に生えている広葉樹が交じった山を広げたいと思っ



写真1 「どんぐり山 なかはたのもり」

いたので、早速に里山を持つ農家へ出向きドング리를植える交流の趣旨を話したところ、二つ返事で「面白い、引き受けようじゃないの」と即答を得ることができました（写真1）。その返事を持ち竹前氏と二人で中幡小学校に伺い、この秋に実施しようとしてトントノ話で事が進んだのです。

そして平成十二年十月。都庁の見える小学校から五十名の子供たちが飯田を訪れ、環境教育と地域の里山保全を図る「ドングリの森小学校」が緒につきました。

ドングリの森小学校で目指したこと

本事業は平成十二年四月に初めて話を聞いたため、開始に当たり市では本事業の予算化をしませんでした。行政の常識では前年度のうち、事業計画を立案し目標を定めて予算計上するわけですが、この時はあえ

てスピードを優先し予算を考えずに協議を進め、補正予算で上司の決裁を受けるという横紙破りを決行したのです。

そうしたこともあり、次の目的は事業を走らせながらの後付けであることをご理解ください。

1. 中学・高校中心の体験教育旅行を都市部小学校に拡大誘致し経済効果を出す
 2. 交流を通じて飯田をふるさとと感じ、いつまでも通ってくれる子供をつくる
 3. 都市の同学年との交流により地元を誇りとする子供をつくる
 4. 日本の自然環境や農山村を大切にすることを醸成する
 5. 里山荒廃を防ぎ、地域の自然環境を保全しつつ広葉樹の森づくりを進める
- これらの目的を達成させるには毎年、植樹一回の体験活動で終わらせないことでした。
- 植樹をした子供たちは、その里山でドングリを拾って持ち帰り、学校で発芽させ三月まで育て、卒業式に次の六年生へ手渡す。新六年生は十月まで育てて再び飯田に来て植樹するのです。
- 都市の小学生たちに「飯田のドングリの里親」になつてもらうことで、単年のイベントではなく継続して飯田を訪れるきっかけをつくる



写真2 ドングリの森小学校 植樹

こと。植樹を行う里山のドングリを使用することで、外来樹を持ち込まず地域の自然環境への負荷を無くすことに配慮しました**写真2**。

これにより、この都市と農村の循環がずっと継続できれば、いつしか見事なドングリの森が出来上がると考えたのです。

第一回目の行事が成功し、次に都市と地元の子供の交流を促すことにしました。

都市から子供たちが訪れ、植樹や森林体験をする従来の一方通行型の体験観光ではなく、地元の子供たちと交流させるなかで、地元の子供たちを育てたいと当初からもくろんでいたからです。

そこで渋谷区の教育委員会も活動に同行

してもらい、現地で飯田市教育委員会との接

点をつくることから学校長同士の交流を深化させるなかで、開始から三年後に学校間交流もできるようになりました。

こうしてドングリという媒介から秋は飯田市の小学校、冬は渋谷区の小学校を訪れる双方の交流が実現しました。

自分の子供を連れて遊びにおいて

地球環境の問題が語られた一九七〇年代から、我が国では十年遅れの一九八〇年代ようやく「環境教育」という言葉が広まりました。もともと教育現場では「環境教育」と言わなかったものの、すでに大国の核実験による放射能の危険性や工場排煙による大気汚染など社会科の授業で取り組んでいました。一般的に大気汚染の脅威が理解されたのは「光化学スモッグ」でしょう。

昨今では酸性雨による森林被害やナラ枯れが騒がれています。ナラ枯れは虫がカビ菌を媒介し被害を起こしていますが、本当の原因は炭生産をしなくなったためナラなどの樹木が、更新期になつても伐採されず老木で放置されていることではないかと思っています。

谷地に散在するわずかな農地しか持たない山間地域では、ほぼ自給農業であり基幹産

業は林業と炭の生産でした。二十年で成木となるナラなどを計画的に伐採し炭にしてみました。エネルギーの主体が化石燃料に移行したことで衰退しました。

暮らしを支えた産業が消えたことで農林業の担い手も減少し、山村の過疎高齢化が進みました。山林を守り育ててきた村人がいなくなれば、山は放置され荒れてしまうのは必然だったのです。

多くの人が美しいと感じる自然や農村景観は、実は人間の手が入っている人為の美であり、美しい新緑や紅葉を楽しめるのですが一般の人には理解されていません。

本事業の取り組みは、もう一度美しい里山を復活させるだけでなく、水源涵養かんようの森をつくり良い水を田畑に供給し、おいしい作物ができる環境を次世代に継承したいということでした。

その意義を胸に収めている受け入れ農家は、子供に「大人になった時、自分の子供を連れてこの地を訪れて、自分の植えたドングリを見てほしい」と語りかけます(写真3)。

本事業は二十年、三十年先の訪問者を現在進行形でつくり続け、地元の子供たちが地域に誇りを持つ運動になっています。今日来て明日帰り、いつしか来たこと体験したことが忘却のかなたに去るのではなく、子供たち



写真3 自分の子どもを連れて遊びにおいて

の記憶に残り、地元に残すような交流の展開を地元も望んでいることが、この言葉に垣間見られます。

これこそが私が望んだ「百年の交流、千年の森づくり」だったのです。

新たな価値創造を担う人材

ニュー・ツーリズムは自然・文化・生活・人など、その地域がもともと有している地域風土を最大の武器としています。それゆえに暮らししている人が触媒として介在しないと、面白さや良さが分からないという欠点を有しています。飯田型ツーリズムは、この地域の「人」に着目した風土産業です。

(株)南信州観光公社(高橋充社長)は、日本初の着地型旅行会社として「体験型観光」を商品としていますが、その使命は地域のさまざまなところに薄く広く多様な効果を振りまく「交流型地域振興」です。ゆえに田舎の一方的な思いや、金を払うのだからサービスは当然という訪問者の考えではなく、全く違う生活環境の訪問客と受け入れ者の双方が刺激し共鳴しあい、全員が幸せを共有できることが大切だと考えています。

業界関係の方ならもうからない観光と分かっていると思いますが、南信州地域で観光交流を担う住民も「体験型観光」を単独の収入源として生活していないし収入を意識していません。

ところが毎年度、その担い手は増加しているのです。なぜでしょう。

私は体験型観光の最大効果は「住民の元気を生産している」ことだと公言しています(写真4)。観光客の増加でお金が落ち家計が豊かになったことより、都市の人が農業の素晴らしさや自然の豊かさ、食のおいしさを口々に言い、高齢者の話を熱心に聞き、喜々として体験をする姿に、暮らしている地域や自身の誇りを持つようになるからです。

ある農家の女性が「収入≠経費≠感動」と



写真4 地元の人々の元気の素

言いました。添乗した方なら、そばで見ていても感動的な涙のお別れシーンに遭遇した経験があるでしょう。従来の修学旅行ではあり得なかった一場面が、農林漁家の人との出会いがここまで心を揺さぶるわけで、毎回の受け入れから、新しい物語が生まれ育まれていく過程が元気の素となるのです。

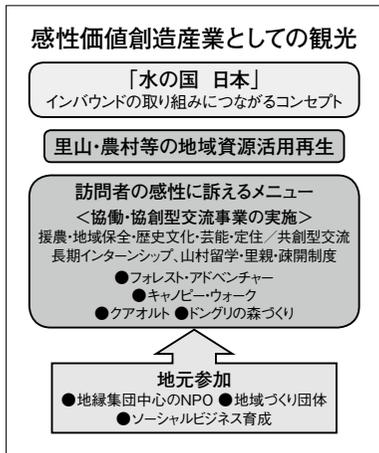
感性価値創造産業としての 観光に構造改革

山林の持つ多面的機能の重要性がいわれられて久しいのですが、前述したとおり日常的に山

に接し保全育成する住民はますます減少しています。山村では子供が高校へ通う年代になると町に出ていき、代わりに有害鳥獣が山から下りてきて田畑を荒らし、結果として空き屋と遊休農地が増加しています。限界集落や消滅集落の山林は、多面的機能の発揮どころか荒れ放題の山と気候変動による大雨で大災害が発生しています。

グローバルな経済成長は山村地域の暮らしに否定的でした。経済発展や情報の進歩は、日本における循環型の地域社会の環境や相互扶助の精神を奪い、経済と教育の格差を拡大することで地域住民の未来に対する思いや意欲を削ぎ取り、地域の跡継ぎを都市へ誘いました。

こうした地域を再生することは「水の国日



本」を改めて世界に知らしめるキーワードとなり、インバウンドの取り組みに幅が出てくると確信しています。

そのために里山を活用再生する取り組みが大切になってきます。観光の視点ではフォレスト・アドベンチャーやキャノピー・ウォーク、クアオルトなど森を使った体験を導入することも良いでしょうし、ドングリの森づくりもまだ可能性を秘めています(図参照)。

とはいうものの、実際は豊かな里山や農村などに豊富な地域資源がありながら、年寄りだけだから無理、もうからない、忙しいと、やらない理由をつけ考えないのです。

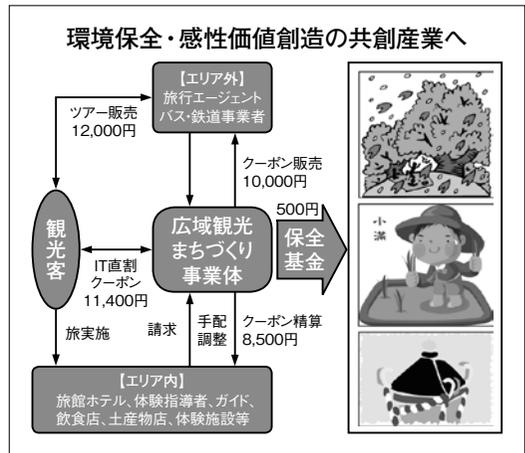
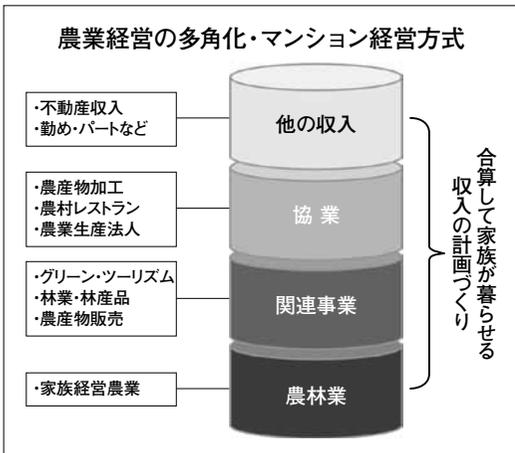
過疎高齢化という社会問題はそうした依存体質をつくった国や地方行政の責任でもあります。自分たちの地域の将来を「誰だか、何だか分からないもの」に委ねてしまうのでは、地域の持続が一層困難になることが予想されます。地域の暮らしや自然、文化など、里山に限らず地域まるごとを商品化するツーリズムは、従来の縦割り構造ではなく総合的なアプローチから、訪問者の感性に訴える創造的産業として地域資産を積み上げていく手法の一つです。ゆえに新たな企画段階では、固有資源やコミュニティに光を与え、これらが生み出す

住民のライフスタイルから、地域発意によるソーシャルビジネスを育む戦略を示しつつ、国民のニーズや地域の食や環境を保全する計画を策定することが大切です。この企画から実施に至る過程では、地縁集団を中心にNPOや地域づくり団体を参画させることや、当事者意識を高くする外部アドバイザーを活用することも一手でしょう。

「人」と「人」のつながりで自然を再生する

戦後の経済成長は生活やエネルギーの革命をもたらしました。木材・木工・炭・竹などの産業が衰退し、働き手が都市部へ移動した結果、農山村が荒廃していきました。元来、悠久の時のなかで、現代のように治山治水で自然を制御するのではなく、生産と生活が一体となり土地の自然に働きかけ、その恵みを糧として共栄してきました。豊かな森林から湧き出す豊富な水があったからこそ、万葉集で『瑞穂の国』と詠まれたのです。

近年の急速な変動は生態系すべての生存権を脅かし地球温暖化の要因となっていますが、こうした共生関係にある人間の営みが価値基準の変化や効率化などで変わり、同時に自然を大きく変化させてきたわけです。



かつて宮本常一は「観光業者たちがどしどし入り込んで、自然を破壊しつつ、いろいろな施設をこしらえて金もうけをしている。そして元からそこに住んでいる人たちは、逆にそういうところを捨てて、もつと生活の立てやすいところへ出てゆきつつある」と、すでに二十数年前に警鐘を鳴らしました。農山村の**縮み**と教育の崩壊がこれ以上拡大する前に手を打たなくてはなりません。

すでに元気な地域を訪ねたり、地域を共に再生したりする新しい観光の形やオンパクのような形も徐々に成立しつつあります。どの手法でも基本は、そこに暮らす「人」と「人」の関わりです。

ドングリの森小学校は、都市の子供と自然の間に地元住民が仲立ちをしているからこそ成立する事業といえます。

農山村の暮らしを再生するために過度な資金投入をせず、次代を担う子供たちを育て、健康な住民と健全な地域を創造するために必要なのは、効果発現が最も早い地域の総合力を結集した都市と農村の「人」と「人」の交流です。

今、求められるのは誰かや何かに依存するのではなく、各々が行動を起こすことです。

(いのうえ ひろし)

癒しの森[®] 長野県信濃町

— 豊かな自然と森が包み込む力が人びとのこころとからだを元気にする

長野県信濃町町長

松木 重博

黒姫高原や野尻湖、小林一茶のふるさととしても知られる長野県上水内郡信濃町は「写真真し」、二〇〇六年四月、第一期の「森林セラピー基地」の認定を受けました。森林セラピーとは、これまでも親しまれてきた森林浴



写真1 紅葉と小林一茶像

の効果を科学的に解明し、心と身体の健康に生かそうという試みです。

森林セラピー事業の取り組みは全国各地で行われ、全国四十四の市区町村が森林セラピー基地等に現在認定されていて、二〇二一年度は第七期としての認定となる予定です。

地域づくりに根づいた 官民協働の事業

信濃町の「癒しの森[®]プログラム」(注1)は、森林セラピー国内先進地としての評価を頂くことがよくあります。事業スタートが早かったことに加え、事業展開の施策をダイナミックに推進できたからだと考えています。最も評価されるのは、事業が地域づくりに根づいている点です。町では住民が自分たちの暮らす森と農業の大切さを早くから再認識し、自らが主体となり里山教室、エコメデイ

カルヒーリング事業に取り組んできました。官民協働での事業展開が功を奏した二例であるといえるのではないのでしょうか。

ストレス社会と叫ばれて久しい昨今ですが、現代人は時間に追われ、ゆったりと生活することができません。デスクワークに外回り、家事や子育てで忙しい毎日、特に都市部に住む人々は気づかないうちにストレスをため込んでいます。

ストレスとは、日頃の追われた生活のなかで「心がゆがんだ」状態を意味します。心のゆがみを取り除くための手段の一つとして、人々はリゾート地に行きます。リゾートという言葉は「リゾート [resort] re:再び so: 並び替える」という意味からきているそうです。毎日の活動、仕事や生活のなかで自分の心がねじれてつらくなったと感じた時、リゾートに行つて元の状態に戻すのです。

心の整理を森林で行おうという試みが信州・信濃町「癒しの森[®]」森林セラピーです。

癒しの森[®] 事業開始の背景

信濃町は、野尻湖や黒姫高原を抱える古からの滞在型リゾート地です。市町村合併をしない「自立の町」を目指した二〇〇三年以降、町の活性化に向けて地域づくりビジョンを策定するにあたり、今後の方向性を考える必要に迫られました。

多くの田舎山村は、公共工事業や大型ショッピングセンター・企業誘致等による一時的な雇用の拡大により地域の活性化を図つ



写真2 メディカルトレーナーによる森案内

てきました。しかし「ないものねだり」をした地域づくりの施策は、景気の変動に左右されやすく、事業が完了したり、店舗・工場が撤退したりすれば大きな痛手を被ってしまう。

信濃町の地域づくりビジョン策定では、町にある資源を改めて見直す「あるもの生かし」の考え方からスタートしました。町の約七割を占める森林は人手・資金不足のため保全・整備が当時行き届いておらず、いわば「負の資産」となっていました。「あるものを生かす」方向への発想転換で森林に新たな価値を見いだしたことが森林セラピー事業開始へとつながりました。

事業開発と住民参画

次の三点の実現を目指して、森林資源を活用して森の癒し効果に着目した「森林セラピー」プログラム開発に着手しました。

1. 自然のなかで自分を見つめ直す
2. 自然のなかで適切な生活リズムを取り戻す
3. 自然のなかで自分の癒しの場所を見つける

この目標に向け「森林メディカルトレーナー」の指導を受けながら、心身の健康を回復する内容としました（写真2）。「森林メディカルトレーナー」とは、一定の養成講座を受

講した町民に与えられる町独自の認定資格です。トレーナーは事業の担い手として、利用者と一緒に森に入り、森林療法や健康チェック等の指導を行います。

認定資格の創設にあたっては、専門家を招聘して養成講座を実施し、現在では百人以上の町民がトレーナーに認定されており、町民全体の約一%に当たります。これは癒しのまちづくりの土台が住民参画によっていることを示しています。

その他に既存のホテル、ペンション等の宿泊施設のなかから、地元食材を使ったヘルシー料理やハーブティーの提供、アロマを用いた癒しの空間づくりへの配慮等、一定のソフト要件を満たした宿を「癒しの森[®]の宿」として認定し、森歩きに加えて、宿でも癒しにつながるサービスを受けられるトータルな保養事業展開を進めてきました。

現在、約二十軒の宿泊施設が認定を受けています。加えて、地元食材や郷土食をふんだんに取り入れ、カロリー計算にも配慮した、農産物加工所のおばちゃんたちの手作



写真3 癒しの森弁当

り「癒しの森弁当」を提案しています(写真3)。
 二〇〇五年からは、役場内に事業全体を統括する専門部署「癒しの森係」を設置したことで、「癒しの森®」事業コンセプトの位置づけがより明確になり、行政・住民・民間企業等の多様な主体が同じ目標に向かって取り組むことを可能にし、官民協働の推進態勢が確立してきています。

事業展開と企業提携

全国で四十四ヶ所を上る自治体等の森林セラピーの事業内容はさまざまです。自治体住民の健康維持のための森林セラピーや個人(一般観光客)を対象にツアー造成した森林セラピーがあります。もちろん信濃町でも住民と一般観光客いずれも対象ですが、民間企業や健康保険組合への営業に特に力を入れています。この背景には、メンタルヘルスを突破口に企業の保健事業だけでなく、福利厚生事業からCSR(企業の社会的責任)事業へとパートナーシップを強め、企業内部での口コミによる顧客数の増加(リレーションマーケティング)を目的としたPR戦略がありました。

企業の総務・人事担当者や管理監督者等を対象としたモニターツアーやシンポジウム

実施の営業活動を行った結果、二〇〇九年に四社、二〇一〇年に七社と「癒しの森協定」を締結しました。二〇一一年現在では十九の企業・団体・大学と提携を結んでいます。

現在提携企業には社員研修や福利厚生事業に森林セラピーを取り入れていただいています。新入社員研修では、早期離職対策として新入社員間でチームビルディングができるようにコミュニケーション向上プログラム等の要素も取り入れるため、町の専門トレーナーとの連携も工夫しています(図1)。

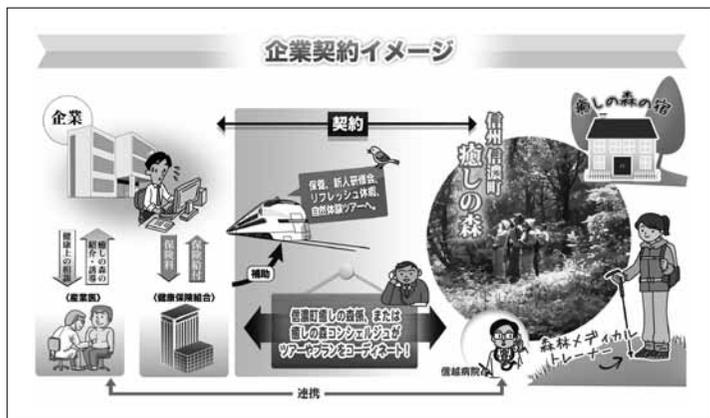
企業のふるさとづくり支援

企業と町がより多様で長期的な視点での協働関係を築くため、二〇〇九年より提携会社と「企業のふるさとづくり協定」の締結を進めています。この協定は、町が取り組む「森林資源を活かした癒しのまちづくり」に、企業からCSR活動の一環として支援を得られることを目指しています。

新入社員研修の継続的な実施、地域の環境保全活動あるいは農業体験を通じての住民との交流等により、社員が信濃町を「第二のふるさと」と感じられるような長期的な取り組みです。

町内の未整備林を提携企業に所有して

図1 癒しの森®と提携企業との契約イメージ



ただき、社員による森林整備や整備費用の支援、レクリエーションの場として利活用する。「森林の里親促進事業」も推進しています。メリットとして、企業は森林をCSR活動PRの拠点として活用できる一方、信濃町には整備・保全の行き届かない森林の環境保全となり、相利共生的な関係が生まれてきています(写真4)。また、町の農産物の社内直販



写真5 新提案エコ旅 癒しの森



写真4 斑尾山から望む信濃町全景

や社員食堂への提供により、地元農産物の流通を促進しているほか、町のイベントへの社員の参加で人的交流も活発になっています。さらに、信濃町と企業の資源を結びつけた新規事業開発も試んでいます。観光バスによる東京―信濃町エコツアーを企画して、企業のCSR理念を森林整備促進につなげる事業展開を旅行会社と提携して町として実施しています(写真5)。

プロジェクトの成果

主な成果を四つ紹介させていただきます。

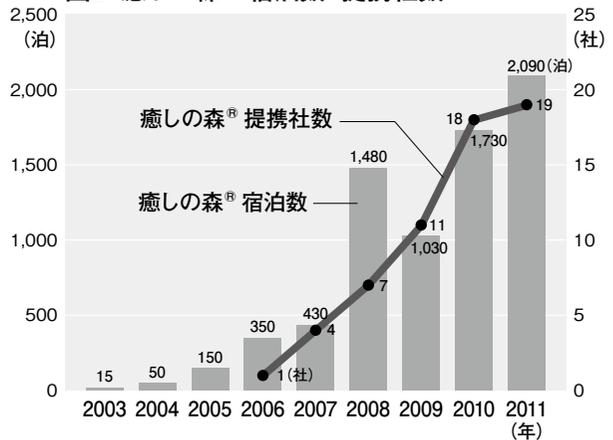
1. 森林の活用による集客の促進

森林セラピー事業の開発と個人や企業への誘致活動によって、宿泊客数は増え続けています。町への入込観光客数が、二〇〇三年の年間約百万人から二〇一〇年の約八十五万人に落ち込むなかで、二〇一一年の森林セラピー事業では事業開始以来最高の年間延べ二千泊超の宿泊客を確保しました(図2)。

2. 企業との連携・交流の促進

二〇一一年までに、十九の企業・団体・大学と癒しの森協定等を締結し、研修等での企業関係の宿泊人数は、二〇〇七年の約九十人に対して、二〇〇八年には約七百人と急増しました。宿泊施設を中心に大きな経済効

図2 癒しの森® 宿泊数・提携社数



果を生んでいると考えられます。協定締結により、企業との間で地元農産物の新たな取引につながり、農業収入の向上にも貢献しています。イベント参加等を通じた社員と町民との新たな人的交流が町全体に活気をもたらしています。

3. 森林の保全・整備

企業のCSR活動との連携により、町外からの人材・資金投入が可能となり、これまで整備が行き届かなかった森林の保全・整備の推進につながっています。

4. 医療体制の充実

森林セラピー事業による「癒しのまち」としての知名度向上により、地域医療を志す医師が町立病院に積極的に赴任してくださるようになりました。事業実施前は医師の定数七人に対して在籍数四人でしたが、現在は定数超えの八人の常勤医師が医療活動してくださっています。町民参加による事業の実施を通じて、町民の健康や病気予防に対する意識が向上したことも大きな成果の一つであるといえます。

プロジェクトの成功要因

成功に結びついている主な要因は次の三つと考えています。

1. 森林資源の再評価

地域づくりビジョン策定に当たって、癒し効果に着目した森林資源活用の再評価実施がその後の森林セラピー事業展開につながりました。「ないものねだり」ではなく「あるもの生かし」の発想による計画づくりが事業の成功への原点です。

2. 専門部署の設置によるコンセプトの明確化

「癒しの森係」の設置で事業全体を統括させたことよって、「癒しの森[®]」の事業コンセプトがより明確になり、行政・住民・民間

会社による官民協働の態勢で臨むことができました。

3. 企業への積極的なアプローチによる民間投資の呼び込み

企業・団体を対象とした事業戦略を打ち立てたことが、事業拡大の要因となりました。企業・団体向けプログラムの開発やモニターツアー等を通じた営業活動、企業側への積極的なアプローチが、企業による職員研修の実施やCSR活動等の民間投資の呼び込みにつながっています。こうした営業活動を「癒しの森係」が中心となって実施できたのも専門部署設置による効果の表れと考えています。

今後取り組んでいくこと

今後は次のような点を考慮すべきと考えています。

1. 市場規模の拡大

これまで企業や健康保険組合をターゲットとして一定の成果を挙げてきましたが、将来にわたって町の活性化を持続させるためには、少しずつ市場規模を広げる必要があります。個人のお客さまをターゲットとして、観光や健康・美容等をコンセプトに、より広い分野での事業展開が望ましいと考えています。

2. 集客事業と森林保全との両立

集客だけを目指して森林保全をおろそかにすると、貴重な森林資源の枯渇につながる恐れもあるため、常に森林保全をセットに事業展開を考える必要があります。今後、事業による収益が森林保全に還元されるような仕組みを構築することが、持続可能な町の発展につながると考えています。

3. 海外先進保養地との交流

信濃町は森林セラピーの国内先進地としてよい評価を頂くこともありますが、世界の保養事業からすればまだまだ後塵^{こうじん}を拝しており、今後は海外にも目を向けていく必要がありますと考えています。欧州でも保養先進地であるドイツのバートヴェーリスホーフエン市は、当町の森林セラピーが参考としているクナイプ療法の発祥地であり、姉妹都市提携を目標に交流を始めています。

ドイツでは予防医療が発達しており、温泉療法や森林療法等に保険が適用されています。今後、海外との交流連携を深めながら、信州・信濃町「癒しの森[®]」森林セラピーをより良いものとしていこうと考えています。

(まつき しげひろ)

(注)癒しの森[®]・信濃町は独自の森林セラピーを確立し、独自性を保護するという観点から事業のキーワードである「癒しの森[®]」を二〇〇七年七月に商標登録しました。

白神山地の恵みを活かすエコツーリズムの推進

白神山地の保全と活用に向け動き出した「環白神」地域の取り組みから

財団法人日本交通公社 主任研究員

大隅 一志

研究員

吉谷地 裕

広大で原生的なブナ林とその生態系によって世界自然遺産となった白神山地は、もともと人の暮らしと深く結びついた山地であり、国立公園でもある屋久島や知床など他の自然遺産と異なる特徴を持っている。白神山地本来の価値を共有し、自然遺産の保全と地域振興の両立を目指すエコツーリズムの推進に、環白神地域が一つになって動き出した。

白神山地の概況と

世界遺産登録の経緯

大自然と人々の暮らしが共存する森・白神山地。白神山地は、青森県南西部から秋田県北西部にまたがる標高約一〇〇〇〜二、二〇〇メートルに及ぶ山地帯（約十三万ヘクタール）の総称である。尾根が南北に走り、赤石川、追良瀬川などがその間を流れ日本海へ注いでいる。気候は冷温帯に属し、冬期の積雪量が多



写真1 南北に尾根を連ねる白神山地。下に広がっているのは特産のニンジシホ（青森県深浦町）

いことから、ブナを主とした森林が広がり、天然記念物クマゲラをはじめ多様な動植物が生息している（写真1）。

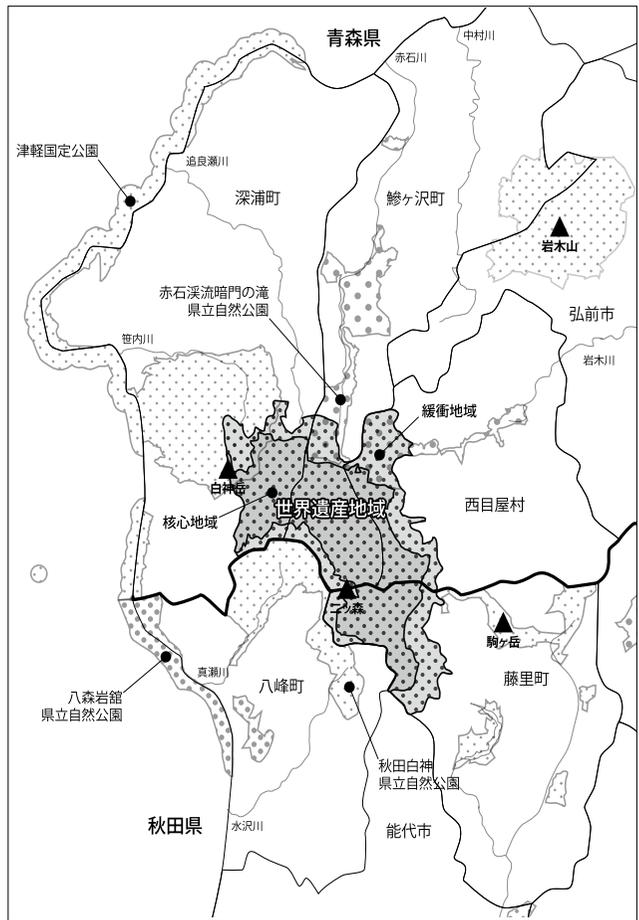
この白神山地の広大な山地帯のうち、林道などが整備されていない約一・七万ヘクタールが、一九九三年十二月、屋久島とともに、日本で最初の世界自然遺産として登録された。

白神山地の遺産価値を要約すると、「氷期の影響による植生の単純化を免れて、原始性を保ったまま残されたブナ属の極相林が東アジア最大級の広さで分布しており、そこにある植物群落の気候変動の歴史における発達・遷移過程と、これに依拠する動物群集を合わせ、顕著な見本である」ことで、一般には「原生的なブナ林と豊かな生態系」として説明されている。人の手の入っていない「原始林」と混同されがちだが、白神山地は、昔から山麓の住民やマタギが山菜採り等で利用してきた山で、山を越えた人的・物的交流の歴史もなく原生的な状態を保持してきた。

日本で最初の世界自然遺産に

白神山地では、一九七〇年代後半、経済交流やブナの採取を目的として、秋田県八森町（現・八峰町）と青森県西目屋村をつなぐ全長二十九・六キロメートルの青秋林道の建設が青森・秋田両県によって計画されていた。八〇年代に入ると自然保護団体や住民等による建設反対運動が活発化し、白神山地は全国的な注目を集めるようになる。水源地の森の危機に立ち上がった赤石川流域の住民に代表される生活者・生業者の声、自然保護団体等の活動、全国から寄せられた膨大な異議意見書、さらに社会情勢の変化等から林道建設が難航。計画の見直しが議論されるなか、一九九〇年三月、国が白神山地を「森林生態系保護地域」に位置づけたことで建設は事実上凍結される。その後、国は白神山地を「自然環境保全地域」に指定、ユネスコ世界遺産への推薦を経て、一九九三年十二月、白神山地核心部の約一・七万ヘクタール（核心地域：約二万ヘクタール、緩衝地域：約〇・七万ヘクタール）が世界自然遺産に登録された（図1）。これにより、国立公園であり観光地でもあった屋久島とは異なり、地元でも裏山程度の認識であった白神山地は、世界遺産登録を機に、一躍注目を浴びる存在となった。

図1 白神山地世界遺産地域とその周辺



エコツーリズムへの取り組み

一般に、世界遺産への登録は観光客の増加に大きな影響を与える。とりわけ、国立公園でもなかった白神山地における遺産登録の影響は大きく、青森県西目屋村では、観光客数が世界遺産登録年（九三年）の十三・六万人から、二〇〇四年には六十一・六万人へと急増した。こうしたなか、白神山地では、二〇〇四年から本格的にエコツーリズム（注）への取り

組みが始まった。専門家等の調査を通して、白神山地の遺産価値の保全管理手法として、自然環境の保護と遺産地域周辺を利用した観光の両立を図る上で、エコツーリズムの推進が有効な手段と判断されたからである。

二〇〇四～〇六年度には、環境省のエコツーリズム推進モデル事業のモデル地区として選定（青森県西目屋村、秋田県藤里町の二町村を対象）を受け、事業者、地域住民、行政機関等関係者の参画のもと、関係者の合意



写真2 「環白神エコツーリズム推進協議会」の設立総会。
会場は熱い雰囲気に包まれた

形成の場となるエコツーリズム推進協議会の設置、エコツーリズムの普及・啓発、地域調査やエコツアー・プログラムの開発・商品化、「白神山ガイドルール」の作成、「白神山エコツーリズム推進基本計画」の策定などが進められた。さらに藤里町では、二〇〇七～〇九年度も環境省事業により、エコツアー事業化研修、人材養成研修等、白神山地のエコツーリズム推進のための継続的な支援が行われた。ただし、この六年間にわたる環境省のエコツーリズムの推進にかかる事業は、地域関係者の合意形成を図りながら一定の取り組み成果を得た一方で、対象が白神山地の一部

地区に限定されたものであったため、策定した推進基本計画やガイドルールも白神山地全体での共通化には至らなかった。

動き出した「環白神」による

エコツーリズムの推進

このような経緯を経て、白神山地では、「環白神地域（＝白神山地を環のように囲む周辺地域）」一体でのエコツーリズムの推進と世界遺産地域の保全を図るため、新たな枠組みづくりに動き出した。遺産地域の保全管理に向けた調整機関である「白神山世界遺産地域連絡会議」と連携する機関として、二〇一〇年十月に「白神山世界遺産地域科学委員会」、翌二年二月には「環白神エコツーリズム推進協議会」の二つの機関が新たに設けられ、環白神地域一体でのエコツーリズムの推進と、白神山地の適正な保全管理の基的な枠組みが構築された（写真2）。

「環白神エコツーリズム推進協議会」は、エコツーリズムを通じた環白神地域の振興および環白神地域の自然・文化資源の保全と適正利用の推進を狙いとして設立された。

協議会の当面の事業としては、

ア 情報の地域共有化

イ 地域情報提供の二元化と「環白神」とし

ての情報発信・共同プロモーション活動
ウ 地域連携による魅力ある「旅行商品」の開発

エ 各関係団体や民間等の連携による観光・

地域づくり活動の推進

など、地域の課題であり、環白神地域で連携して実施することが効果的で重要度の高い取り組みを、重点的に推進することとしている。

協議会設立時の構成団体（正会員）は、白神山世界遺産登録地域を有する自治体（青森県鯉ヶ沢町・深浦町・西目屋村、秋田県藤里町）、環白神地域でエコツーリズムに取り組みとうとする自治体（秋田県八峰町）、白神山世界遺産登録地域を所管する県（青森県、秋田県）、白神山世界遺産登録地域を所管する国の出先機関（東北地方環理事務所、東北森林管理局）で、環白神地域の自治体がまとまって共通の施策を協議・立案し、事業予算を確保し、共同で事業を実施していくための基盤をつくるため、ひとまず行政主導での立ち上げとなった。二〇一二年度からは、準会員として青森県弘前市、秋田県能代市・三種町も協議会に加わっている。

協議会の将来的な目標は、あくまでエコツアー事業者や観光事業者、農林漁業者、地域住民等環白神地域の多様な関係者が、白

神山地の遺産価値や環白神地域での取り組みの意義を共有しながら、実践活動へとつなげていくことにある。設立間もない協議会としては、フォーラムの企画開催等を通して、協議会そのものの存在の周知や、関係団体や民間等多様な組織・人材のネットワーク化を図っていくための地域のプラットフォームづくりを進めていく予定である。

なお、同協議会と足並みをそろえるように、白神山地周辺地域の産学官が一体となって、世界自然遺産白神山地の環境保全と経済・観光振興などを図る活動財源の確保を目的とした市民ファンド「白神財団」設立の準備も進められており、協議会との今後の連携も期待される。

白神山地の価値を伝える エコツーリズムの展開

ブナだけが白神山地の魅力か？

世界遺産への登録以降、白神山地の観光は、十二湖青池(写真3)や暗門の滝など、遺産登録以前から利用されてきた観光ポイント、遺産地域周辺のブナ林など、一部の自然資源を主に対象としてきた。地域イメージとして定着している「世界遺産白神山地＝ブナの自然」は、多くの旅行者が期待するところであり、



写真3 団体旅行の主要目的地である十二湖青池。メディアに頻繁に取り上げられる定番スポット(青森県深浦町)

旅行商品もこれを受けたものが多い。結果、一部自然資源の利用集中による自然環境への影響、白神らしさを十分実感できないことによる旅行者の満足度の低下、さらに宿泊や土産品購入・食事等の消費機会の流出による経済効果の低下、住民の白神山地への関心の希薄化といった問題が顕在化してきた。

こうした諸課題に対応していくためには、自然遺産そのものを直接利用しなくても白神山地の魅力や価値が旅行者・地域住民双方に理解され、経済的な恩恵が地域全体にも及ぶようなツーリズムが求められる。それには、ブナ林等の自然のみならず、地域の歴史

や文化、産業など、里や海の暮らしとの関わりの中から、白神山地の恵みの豊かさやその価値を伝えることのできるエコツーリズムの展開が欠かせない。

人々の営みが伝える白神山地の価値

では、そうした白神の恵みの豊かさを伝えることのできるエコツーリズムとは、どのようなものだろうか。両県や環境省の事業を通して筆者らが関わってきたプログラムづくりのこれまでの取り組みからは、白神山地らしい新しいエコツーリズムの方向性が見えてきた。

例えば、白神山地の大きな恵みの一つに水の豊かさがある。それを伝える素材は、保水力を持つブナ林(水源涵養林、留山など)や湧水、溪流、滝などさまざまであるが、酒蔵もその一つである(写真4)。白神山地には、豊富な湧水と米を使った酒蔵がいくつかあるが、白神の恵みがいかに地域の生業の中に息づいているかを伝えてくれる場であり、前述の自然資源と組み合わせることで、さらに説得力は増したものになろう。

また、白神山地の山の暮らしを営んできた人々は、その恵みを享受しながらも原生的な自然を保ち続けてきた。そこには、マタギをはじめとする山人の自然に対する畏敬とともに、山の恵みに感謝し、恵みを翌年も享受で



写真5 マタギは来年も山の恵みが得られるように、資源を採り尽くさず、敬意を持って大切に頂く。だからこそ白神山地の自然が保たれてきた(青森県西目屋村)



写真4 水源として守られてきたブナ林・留山から引いた湧水と、同じ水で育てられた米で酒造りをしている酒蔵(秋田県八峰町)



写真7 漁師番屋にあふれる道具や走り書き。漁師の暮らしぶりが見えるようだ。漁師たちは海の恵みと白神山地とが深く関わっていることを経験から知っている(青森県深浦町)



写真6 ダム建設に絡み集落移転した人々の暮らしや林業の道具の展示。地史を伝える貴重な資料として保存・活用が望まれる(砂川学習館/青森県西目屋村、2010年11月に閉館)

きるよう必要以上に採り尽くさないという精神文化や暮らしの知恵がある。白神山地だからこそ伝えられる自然と人との共生のあり方と言えよう(写真5)。

あるいは、林業、農業(白神山地の水を使った米作り等)、漁業(川、海)、それらを礎とした地域の歴史(津軽藩、北前文化等)、暮らし(山菜、保存食、伝統料理等)など、白神山地とその周辺(山麓、川沿い、海辺等)に見られる自然と人々の営みからは、いかにこの地域が白神山地の恩恵に支えられているかがよく理解できる(写真6,7)。

環境共生地域・白神の 実現を目指して

世界自然遺産白神山地は、そのふもとにある里・海の暮らしとの共生の上に存在する地域の恵み、自然の豊かさのシンボルである。環白神地域が一体となったエコツーリズムへの取り組みを通して、自然環境との共生や都会とひと味もふた味も違った暮らしの魅力に地域の人たちが気づき、訪れた人をも魅了する「環境共生地域・白神」の実現を願ってやまない。

(おおすみ かずし/よしやち ゆたか)

(注) エコツーリズム：地域ぐるみで自然環境や歴史文化など地域固有の魅力を観光客に伝えることにより、その価値や大切さが理解され、保全につながっていくことを目指すツーリズムのあり方。

三陸の観光復興

— 岩手県田野畑村の取り組み (3) —

財団法人日本交通公社 主任研究員

大隅 一志

東日本大震災から十カ月余りが経過し、被災地では、それぞれに復興への一歩を踏み出しつつある。本稿では、当財団が支援をしている田野畑村の観光を中心とした村復興の歩みを引き続き紹介する。

田野畑村災害復興計画策定の動き

● **正念場を迎えた災害復興実施計画の策定**
集落再建に向けた具体的な協議はまだ続くものの、被災者の仮設住宅への移転が一段落し、冬を間近に控えた十一月十九～二十日の両日、田野畑村の復興祈念祭が開催された。避難場所ともなった会場のアズビイホール周辺には、被災者を含め多数の村民が集まり、ひとときのイベントを楽しんだ。

それから半月後の十二月上旬、六回目となる村災害復興計画策定委員会が開催された。復興実施計画の本格的な取りまとめに向けた

協議に入っている。これまでに、村およびコミュニティ再生チームによる被災住民への丁寧なアンケートや聞き取り調査から、今回の津波浸水域上部の後背地とさらに高台部を候補地とした集落再建の方向が見えてきた。これを踏まえた策定委員会では、村全体の復興に向けた地区別グラントデザインの方角性と、被災地区の具体的な土地利用のあり方が検討された。

地区別グラントデザインについては、地区の特徴や被災状況等を踏まえ、これまで以上に各地区の特色を明確にしていく方向で、観光の視点も強く反映されつつある。被災された住民の多くが高台移転の意向を持つなか、被災した漁村地区の復興には観光的側面からの復興策が欠かせないものとなっている。各地区のグラントデザインの具体的な方向は、実施計画が固まった段階で紹介することとしたい。

● 難しい計画策定の進め方

一般的に基本計画段階で方向づけられるべき地区別のグラントデザインは、田野畑村では実施計画策定段階での議論となった。これは、被災住民の意向を踏まえ慎重に集落再建候補地を検討している村の進め方もさることながら、被災跡地の将来的な土地利用が、極めて現実的で難しい問題

を含んでおり、単なる理想的な青写真では到底描けないことが背景にある。津波の浸水エリアに残された低地オープンスペースをどう活用するかは、漁村地区の将来を方向づける重要な課題であり、委員会でもまだ結論は出ていない(写真1)。



写真1 被災した漁村地区の将来にとって重要な浸水エリアの活用(被災直後の鳥越地区)
資料: 田野畑村「広報たのはた」5月号

「机浜番屋群」再生プロジェクト



漁村の歴史と伝統が息づく
あの原風景を取り戻したい
「番屋群再生サポーター」にご登録を!

■「机浜番屋群」再生プロジェクトとは

日本一の海岸美「北山崎」に位置し、漁村の文化や営み風景がそのまま残っていた「机浜番屋群」は田野畑村住民と観光客との交流拠点として賑わっていましたが、3月11日のあの日、東日本大震災による津波によって、一瞬のうちに静寂もたふされてしまいました。

このプロジェクトは、田野畑ファンの皆様との「絆」、住民（漁民）と行政（村）の「協」により、村の復興のシンボルとなる新しい番屋群づくりを進めていく活動です。

漁村の原風景を取り戻したい。被災地田野畑村の漁村文化を一緒に再生したい。そんな想いを共有できる皆様へ「机浜番屋群」再生プロジェクトへのサポーター登録をお願いいたします。

■ 机浜番屋群 とは

田野畑村の机浜に現存していた25棟の「番屋」は、昭和8年の大津波以降の建替で、主に漁具の収納やワカメ、コンブの乾燥作業場を目的にしたものです。漁夫の住居は津波や津波を避けるため、そして風雨や炎焼きをするために高低差約200メートルの高台に建てられましたが、漁期でたしくなると海に近いこの番屋に何日も泊まりこみました。

昭和後期より社会環境整備や車の普及、漁業後継者不足で番屋の解体化が進み、急速に漁村文化が失われようとしていましたが、地元青年会による保存継承活動がもとで、平成18年水産庁の「未来に残したい漁業漁村歴史文化財産選」に選ばれ、貴重な漁村の原風景をとどめるエリアとして観光客や田野畑ファンから愛されておりました。

図1 水産庁「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に選ばれていた三陸の漁村文化・風景の再生を目指す「机浜番屋群」再生プロジェクト

<http://www.vill.tanohata.iwate.jp/banya/index.html>

● 交流・観光プラットフォームの構築

今後、都市サポーター（都市住民、専門家、企業など）を巻き込んだ村の観光復興（ひいては村全体の復興）の誘導には、番屋再生だけでなく、植樹活動、長距離自転車歩道整備、産業支援、集落・コ

ーの確保・育成、運営の体制づくりなど、具体化へのロードマップづくりを進める予定である。

「田野畑村の未来を語る会」の開催（写真2）などを実施し、村がこれまで長年構築を重ねてきたネットワークに加え、震災を機に生まれた新たなサポーターを巻き込み、村と都市サポーターが連携・協働していくための基盤づくりを進めている。今後、ウェブサイトを活用した情報交流や交流イベントなど、都市サポーターと村をつなぐ活動を展開していく予定である。（おおすみ かずし）

都市住民との交流を活かした 村復興支援に向けて

● 立ち上がった「番屋再生プロジェクト」

田野畑村で考える復旧・復興段階での観光復興の方向の一つが、支援型の交流である。村では八月中旬、三陸らしい漁村文化や営み風景として残しながら津波で全流失した「机浜番屋群」の再生を目指す「番屋再生プロジェクト」を立ち上げた（図1）。都市サポーターの参加を募り、経済的な支援を受けつつ、村民や漁業者と交流してもらいながら番屋群の再生を目指すものである。今後、漁業者・サポーターを巻き込んだマスタープランづくりをはじめ、コーディネートやインスタクター

の確保・育成、運営の体制づくりなど、具体化へのロードマップづくりを進める予定である。

「田野畑村の未来を語る会」の開催（写真2）などを実施し、村がこれまで長年構築を重ねてきたネットワークに加え、震災を機に生まれた新たなサポーターを巻き込み、村と都市サポーターが連携・協働していくための基盤づくりを進めている。今後、ウェブサイトを活用した情報交流や交流イベントなど、都市サポーターと村をつなぐ活動を展開していく予定である。（おおすみ かずし）



写真2 「田野畑村の未来を語る会」には多くの田野畑関係者や支援者が集まった（東京会場）

低地オーブンスペースは、地区の将来を考え、た時、決して「使えない土地」であってはならず、むしろ、集落再建に向け新たな付加価値を生み出す可能性が模索されるべきであろう。これには防潮堤の必要性やそのあり方（位置や高さなど）が大きく関わっている。陸と海を隔てる巨大防潮堤は、小さな漁村風景を一変させ、漁村の将来的価値を大きく損なうことは想像に難くない。「人の力では抗うことのできない自然災害から人命をどう守るか」「新しい価値を持った漁村にどう生まれ変わるか」——復興にスピード感はないが、この難しい二つの課題解決に向けては、時間がかかっても将来を見据えたしつかりとした議論が必要である。



連載 I
あの町この町
第47回

真宗王国 ——三重県津市一身田寺内町

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト) 著

門前町は「ごぞんじだらう。寺や神社の前に発達した町であつて、長野の善光寺や伊勢神宮がよい例である。山門や鳥居の前方、たいていは大通りをはさみ店がきちんと列をつくつて並んでいる。

では寺内町はどうか。ために辞典(新明解国語辞典)をひらいてみたところ、「門前町」は出ていたが、「寺内」はあつても「寺内町」は見つからない。寺内には「寺院の境内」と説明されており、これに町がつくわけだから、寺院の境内に発達した町になるが、そうなるのとよけいにいぶかしい。いかに大寺といえども、境内に町ができたりするものだろうか。

三重県の県都津市からJR紀勢線なら一身田駅、伊勢鉄道なら東一身田駅、近鉄だと高田本山駅。どの駅にせよ、けっこう歩かなくてはならないのは、寺内町を突っ切つて線

路を通すわけにいかなくなつたせいだらう。「一身田寺内町の館」発行のパンフレットが、長い歳月にまたがる町の成立を簡明に要約している。

「農業が豊かな穰りを産み、集落が誕生しました。一身田と名前がつけました。千余年の時代は江戸。寺内町が完成しました」

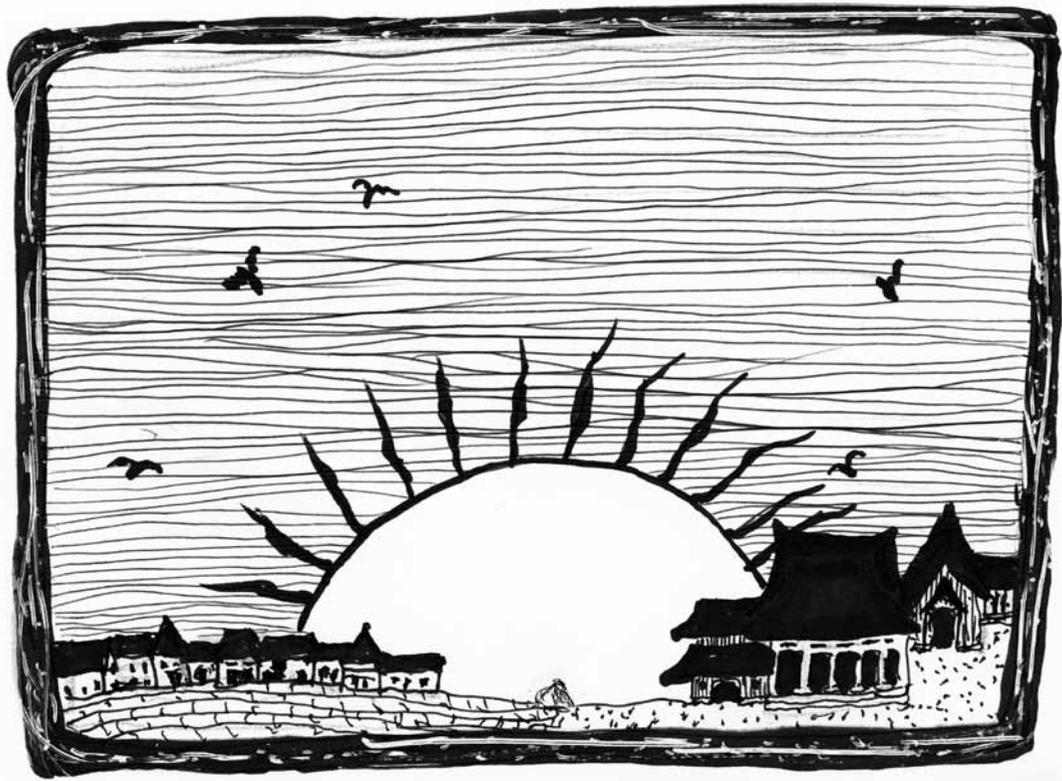
簡明すぎてよくわからないが、大きな流れはわかる。米のよくとれる豊かな土地に寺院がつくられ、寺と緊密なつながりをもつて町が形成された——。

「高田本山駅」の名前につられて近鉄にしたのだが、これが一番遠かつた。なんのへんてつもない通りに行くこと十分あまり、右手に豪壮な甍が見えてくると、とたんにまわりがガラリと変化した。平成から一足とびに明治。大正にうつつたぐあいである。いかにも古

風なつくりの酒屋、食堂、履物店、和菓子屋、仏壇仏具店、米屋、醤油醸造所、織布工場……。

高田本山専修寺の門前町にあたるが、ふつうは門前に縦にのびるのに、ここでは寄り添うように横に形成されている。さらに外まわりを「環濠」とよばれる濠が取り巻いている。日本で唯一、ほぼ完全な形で現存するもので、東西約五百メートル、南北約四百五十メートル。かつては濠の外側に二メートルから五メートルに及ぶ堤があつた。堤と濠でガツチリと守られ、独立した一つの真宗王国をつくつていた。

「寺内町の館」に写真や模型で歴史が紹介してあつて、にわか勉強で知つたのだが、親鸞が七五十年ばかり前に上野国(栃木県)の二宮町高田に専修念仏の根本道場を建てたのに始まる。高田教団の本寺として関東で



環濠の町 一身田寺内町

発展したが、兵火で炎上したりしたので、江戸になって弟子筋が伊勢国に新しく専修寺をつくり、こちらが本山として定着した。正式には「高田本山専修寺」というのは、そんな歴史にもとづいている。

山門前方に石橋があつて、昔は前に矢来が設けられていた。これを「釘貫門」といい、一歩入れは寺内、石橋の外が寺下、そんなふうに聖と俗とを分けていた。

本山の中心は親鸞上人を祀る御影堂、通天とよばれる屋根つきの廊下と結ばれたのが如来堂、まわりに教学院、大講堂、食堂、宝物館、御廟、納骨堂、信徒会館にあたる翔南閣、高田青少年会館、婦人会館……。

それにしても御影堂の途方もなく大きいこと。山門から見たときはさほどに思わなかったが、近づくにつれて軒が天空高くせり上がり、大屋根が際限なく広がっていく。オリジナルは寛文六年（一六六六）の建造というが、何度か火災にあつて、現在の伽藍は平成二十二年（二〇一〇）に大工事が終わり、落成慶讃大法会があつたばかり。ま新しい畳数が七百三十九畳というから運動場に大屋根がのつたぐあいだ。聖務のための大ドームであつて、あらためて巨大教団のもつ方に圧倒される。

聖域は肩がこるので、早々に俗域へと退散した。石橋を渡ったところを「向拝前」といって、昔は旅籠が軒をつらねていたらしい。門前で拝するという意味だろうが、目の前に白い石畳がのび、その前方に山門と御影堂が二段構えで控えている。いかにも聖所を拝するたずまいである。

正方に近い寺内町の環濠には、正面の山門のほかに桜門、赤門、黒門の三門があって、明け六つ（午前六時）に開き、暮れ六つ（午後六時）に閉じられた。桜門は京都方面、赤門は伊勢街道と東海道經由で江戸方面、黒門は伊勢への出入り口だった。黒門は環濠を兼ねた毛無川のもとにあつて、寺内町全体の惣門にあたり、番所が設けられていた。そして門の外には遊廓街があつた。

黒門跡の近くに、いかにも年代物の石の道標があつて、悠大な字体が四面それぞれに伊勢、江戸、京、御堂を指し示している。おもえば親鸞の弟子はいいロケーションを選んだものだ。江戸時代の一級国道である伊勢街道、また東海道に近く、津の港があり、しかもどこからも適度のへだたりがあつて独立性を保つことができる。寺の文書には伊勢・伊賀三十二万石藤室家からのお興入れが記録されているが、太守のうしろ楯に守られて

いる。教団政治にも有能な坊さんがいたとみえる。

醤油醸造の下津醤油は安政三年（一八五六）の創業、新勇商店は百六十年前から荒物雑貨を商っている。「たけやまんじゅう」のたけやは同じく百六十年前からまんじゅう一筋。武野薬局の案内に「二〇年位前から高田本山の前で薬屋を営んでおります」とあつて、年数に「位」がつくのは、あまり古くて創業年がはつきりしないせいだろう。ここではこんにやく屋も「杉甚の蒟蒻」として「八十余年の伝統」を誇っている。「櫻おこし総本家春乃舎」

しはもと「福寿玉おこし」といって、正徳年間（一七一〜一六）より製造販売。さる名士が「萬葉の櫻花」にたとえたのにちなんで名が定まった。

老舗の店を見ていくと、おおざっぱにいうと三分類ができそう。一つは高田本山御用達のな商いで、仏壇仏具をはじめ、和紙、ローソク、ちようちん、畳、履物、花、お茶……。こんにやくは精進料理に欠かせない。

二つ目は参詣みやげの店で、櫻おこし、たけやまんじゅう、つるやの酒万十、岡田屋のお多福まんじゅう、本山名物ちようちん茶そば等々。

三つ目は通常の暮らし一般とかかわり、ふ



道標

とん、文具、理容・美容、酒、魚、写真、本、印刷、農・工具、衣料、食材、その他もろもろ。むろん、三分類が相互にいくぶんかずつ、かさなり合っている。

伊勢の国は古来、伊勢木綿で知られてい

た。昔は一身田を中心に百軒ほどあったというが、世がかわって現在は一軒だけ。商標がマルに一の字で、「純綿糸・堅牢染」がうたつてある。

その伊勢木綿の卸商だった商家が、店舗



共生の木

のあいだにひっそりとのこされている。べつ
の旧家は呉服商だった。またべつの家は井筒
屋といって小間物商を営んでいた。以前は機
織りの音が聞こえた織元。雑穀問屋だった
家は荷車が入りできるように入口の左側
が広くとつてある。裏までは見えないが、ど
の家も裏手に蔵をもち、堅実に富を蓄えて
きた。「一身田寺内町案内看板の会」のチラ
シが述べている。

「……非常に状態よく保存されている」

「……古式形態をよく残している」

「……当時の姿をそのまま残すたがずまいである」

「景観を大切にしてい、店舗を昔風に新築した」
世の好み、また商法が大きく変わったが、
シャッター街などにはならなかった。歴史あ
る町そのものが旧時代の生き証人役として
大きな観光資源に移ろうとしている。そのた
めの努力と工夫が見てとれる。

たしかに大寺の門前にあつて、門前町にち
がいないが、あえて寺内町というしており、何
かがちがう。かつて寺と一体となり、土堤と
濠とで守られていたように、町と寺とのわか
わりが門前町とは大きくちがっていたらしい
のだ。

逆にまた何かと似ている——さアて、何

だったか。一軒ごとに足をとめて考えているうちに思い出した。南ドイツのフロイデンシユタットという小さな町とそっくりである。

プロテスタント（新教徒）の町として知られている。教会をまん中にして町が基盤目にひろがり、現在は埋め立てられたが、かつては四方に濠があつて、跳ね橋で渡った。南ドイツはカトリックの強い地方だが、一六世紀に土地の領主がプロテスタントとなり、プロテスタントという理由で迫害されていた人々のための町づくりをした。移ってくる者には土地と営業資金が貸与された。教会出入りの商い、訪れてくるプロテスタント信者のためのみやげ物、周辺の住民に向けての商売。地球の両側で、ほぼ同じころに、同じような宗教都市が誕生していたことになる。

ヨーロッパでは一七世紀に「三十年戦争」といつて、三十年もの長きにわたり旧教徒と新教徒が殺し合いをした。旧教地帯の中の孤島のような新教の町は四方から攻められ、破壊された。戦争が終わったときの町の人口七十二人と記録にある。宗教戦争のむごたらしさがよくわかる。

以後、四百五十年、フロイデンシユタットは美しく甦った。町の条例で二階建て以上はダメ。赤い屋根のすっきりした家並みが整然

とつづいている。店ごとにショーウィンドウが工夫されていて、ウィンドウ・ショッピングだけで半日たのしめる。どの店も教会から貸与された資金は、とつくに返済したのだから。誇らかに「一六九二年創業」などとうたっている。

寺内町の形成にあたって、寺と住人とのあいだに相互援助のきまりがあつた。寺は真宗高田派門徒に土地を貸与して営業資金の面倒をみる。採算がとれて以後の返済になり、困ったときのつなぎ資金の制度もあつた。そのかわり門徒は寺の必要に応じて出仕して、聖務の下働きをする。キリスト教会には半聖半俗の人が世話人の役目になっていて、仏教にも高野山における高野聖たかねのように半聖半俗の人が布教や勤行の手伝いをした。真宗高田派はそれをビジネスにも結びつけた。これもにわか勉強で知ったことだが、一身田寺内町では寺と商店だけでなく、一身田の村々、また信徒と町とが、かたいつながりをもっていた。寺の行事にやってきた人々は、おみやげだけでなく農具、衣服、生活用品を買っていく。通い帖による「つけ」で買って、年に二度の節季払い。おおかたが信用取引で成り立ち、しかもそれが何代にもわたつてつづけられてきた。信心を背にしたローン

と返済のシステムである。門前町にもあつたかもしれないが、寺内町ではそれがシステム化されていて、信仰とビジネスと暮らしとが効率よく運用されていた。それぞれの家の蔵には、何代にもわたる通い帖式の書類が眠っているのではなからうか。

「寺内町の館」でそのあたりのことを、ほんとうはもつと立ち入つておたずねしたのだが、なにぶんお内証にわたること、係りの人も答えにくいのだ。学者の本や論文などはあるのだから、一般向けにきちんと公開してもいいのではあるまいか。すでにおおかたが歴史資料になつており、まさにそれが寺内町独自の特色を伝える無形文化財というものだ。宗教と暮らしの二人三脚でつくり上げたコミュニティが、数百年にわたつて実在した。それは今も由緒ある形態をとどめてのこつている。ガイドマップには土地の言葉をまじえずすめてある。

「ゆつくり見てここに！面白いこといっぱいあるに！」

その「面白いこと」に、目に見えない歴史遺産を加え、目に見える仕組みを考えてもいいのである。たとえば向拝前を基点とした寺町筋に時代色をとりこんだショーウィンドウを設置する。一身田商工振興会のパンフレ

ットには、シヤレたスケッチがついていて、店」このひとことがあざやかだ。

「日本の心に、ただただ合掌」(お茶の店)

「伝統に夢のせて、頑固一徹のこだわり店」

(呉服店)

「今も昔も、信用を誇る店、高田本山護持

会の店」(仏具仏壇店)

「畳でのんびり快適、い草の香りで森林浴効

果」(畳店)

ショーウィンドウを工夫すると、町歩きが



太鼓門

いちだんとたのしくなる。歴史と伝統はありあまるほどあるのだから、それを現代のセンスで再現する。蔵で眠っているご先祖に登場してもらってもいいのである。新しいものがすぐに古びる世の中では、古いものを新しいう。古さという珍しい意匠が現代人をとらえるはずだ。

寺町筋の中ほどに細い溝があつて、「旧村界溝」の標識が出ていた。中世条里制のころ、一身田村とお隣の窪田村を分ける目じるしだ

ったという。現在でも、この溝を境に番地が三桁と四桁に分かれ、条里制の名ごりが見られるそうだが、歴史的コミュニケーションには、中世と二世紀がこともなげに同居している。

西の環濠に近いところに一御田神社が祀られている。棟札によると一五世紀までさかのぼるから、それ以前につくられた。一御田と一身田、名称が双子のようなのは、古くからの守り神としての由来によるのだろう。そこに知恵のある信仰集団がやってきた。日本人の町づくりの珍しいケースにちがいない。

冬日はつるべ落とし。まだ午後早い時刻だというのに陽ざしが見るまに弱まっていく。整備された環濠沿いに黒板と小屋根の壁がつづき、あいまに白壁の蔵がまじっている。車もこないし人もいない。しんと静まり返って、ひとのいない町のような。どこかで太鼓のような音がする。寺門の一つに太鼓門があつて、法要のときなど勤行開始の合図に打たれると聞いたが、もしかするとその太鼓かもしれない。本山護持会の店の主人は、仕事着の上に黒の衣をひっかけて出仕に出向いているのだろうか。たしかに寺の行事には、黒の簡易服に革靴の人がいて、敷物を運んだり、幕を引きまわしたりしているものである。

(いけうち おさむ)



連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り68

「幸せの国」の観光政策

旅行作家

山口 由美

ラグジュアリー・エコツーリズムを
推進するブータン

震災後初めての国賓として来日したブータンの若き国王夫妻は、礼儀正しく威厳ある振る舞いで日本国民を魅了した。しかも、その国が、GDPならぬGNH（国民総幸福量）という指標を打ち出す「幸せの国」であることに、人々は大いに興味を持ったのではないだろうか。

GNHを提唱したのは、今回来日したジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク国王の父に当たるジグミ・シンゲ・ワンチュク国王である。一九七二年、十六歳で王位に就いた前国王は、長く鎖国状態にあった国を開き、中国とインドという大国に接した小さな国に指針を与えたのだった。

美男美女として話題になった現国王夫妻だ

が、父である前国王のほうがかもつとすつきりとした男前だ（と私は思っている）。

私がブータンという国を知ったのは、中学生のころ、たまたま自宅にあった本『シッキムとブータン』がきっかけである。一九七四年に前国王の戴冠式があり、私はロックスターに憧れるように、神秘の国の若き国王に思いを寄せた。やがて本多勝一の『極限の民族』が愛読書となり、好奇心のアンテナを世界に伸ばすようになった私が、最初に強く興味を持った国がブータンだったのだ。

その後、『極限の民族』のひとつに描かれたニューギニアには十回以上訪れることになったのだが、ブータンとはなぜか縁がなかった。ずっと気になる国だったからこそ、軽々しく訪れてはならないような気がして、訪問する機会を逸したまま、長い年月が流れてしまったのである。

日本で広くブータンの認知度が高まったのは今回の国王夫妻来日だろうが、海外のホテルに興味を持つ人たちの間でブータンが知られるようになったきっかけは、二〇〇四年に開業したアマンリゾーツのアマンコラだっただけだ。

前国王が国を開いて以来、ブータンは、独自の観光政策を実施してきた。入国するにあたっては、一日当たり決められた滞在費を滞在日数分、支払わなければならない。もちろん、その費用で滞在費が賄われるのだが、現在、一人一日二百USD、個人旅行の場合は、さらに五十USDが上乘せされる。安くはない金額である。

つまり、バックパッカーの気ままな自由旅行はできないシステムなのだ。例えばソ連時代のインツーリストにもこうした決まりがあった。滞在費を支払い、パウチャーを発行し

てもらわないとビザが下りない。

旧社会主義国の不自由な旅を連想させるからだろうか、国王夫妻来日をめぐる一連の報道の中で、こうした観光のあり方をブータンの暗部として論じたコメンテーターがいた。しかし、国内に抱える人種問題と並列にブータンの観光政策を語るのは間違っていると、私は違和感を感じずにいられた。

「幸せの国」といえども、二二世紀のグローバル化する世界に生きる国家である以上、おとぎ話の「夢の国」ではあり得ない。それなりの問題はあるだろう。だが、少なくとも「観光」は、ブータンの屋台骨を支える、成功している主要産業である。

彼らが観光客の受け入れにコントロールをかける理由は、人数を制限することで自国の環境負荷を最小限にとどめながら、最大限の



雪を被ったヒマラヤを背景に森に包まれて佇むアマンコラ・バロ 写真提供: Amanresortsアマンリゾーツ

観光収入を得ることにある。そうした考えを象徴するのが、ブータンで最初に開業した外資系ホテルが、一泊五百USドルはするアマンリゾーツであった事実だと思う。

実際に、現在、こうした観光政策を実施している国は少なくない。例えばボツワナ、セーシェルなど、豊かな自然を背景にいわゆるエコツーリズムを実践する国々である。ブータンほどはつきり一日いくらと決めているところは少ないが、客単価の高いロジックな建設を認めないことで、結果的に人数をコン



王家の避寒地「冬の離宮」の建物の一部をレストランやライブラリーとして利用するアマンコラ・ブナカ 写真提供: Amanresortsアマンリゾーツ

トロールしている。

今や旅行市場の重要なジャンルのひとつであるラグジュアリートラベル。しかし、日本では、都市の高級ホテルに泊まり、ブランドブティックで買い物をし、カジノで大金を賭けるような、画一的なイメージが先行し、正しく理解されていないように思う。それが、東北の被災地を訪問し、犠牲者に祈りを捧げ、子供たちに心温まる龍の例え話をしてくれた国王のイメージと相いれなかったのだろう。だから、コメンテーターは、帰国時に王妃が手にしていたエルメスのケリーバッグにケチをつけたのと同じ拒否感を、ブータンの観光政策に抱いたのかもしれない。

ラグジュアリートラベルには、豊かな自然や独自の文化を持つ国や地域が、人が押しかけることによる環境破壊を最小限にとどめながら、観光で収入を得られるようにするための知恵としての側面がある。そして、それは日本の観光の中で決定的に遅れている分野ではないだろうか。

まだエコツーリズムなんて言葉もない一九七〇年代にそれを提唱したブータンは、GNHを発想したのと同じくらい、偉かったと思うのである。

(やまぐち ゆみ)

新着図書紹介



A5判 160ページ
定価 1,400円
七つ森書館

一九九三年（平成五年）に白山山地が屋久島とともに「世界遺産条約 自然遺産」に登録されたから、十八年が経過した。

著者は『世界遺産 白山山地 自然体験・観察・観光ガイド』（根深誠著、七つ森書館）で、世界遺産に登録されたことにより国際的な評価を得た白山山地が、観光資源として活用され、多くの人たちの注目を集めてきたことについて、「このような事態は、それまでの白山山地の歴史にはなかった新しい局面」と振り返る。

白山山地の世界遺産地域としての面積は、約一・七万ヘクタールに及ぶ。その範囲は青森・秋田の両県にまたがり、その四分の三は青森県の津軽地方に、四分の一が秋田県の県北地方に属している。その白山山地に現在のブナが発生したのは九千〜八千年前のことで、この自然は動植物だけでなく人間の生活にも恩恵を与えてきた。

白山山地には四千〜三千年前といわれる縄文時代の後期と晩期の遺跡が数多く存在し、縄文時

代と変わらない時空を超えたブナの自然の息遣いを嗅ぎ取れる。ブナの森が「縄文の生きた化石」といわれるゆえんであり、世界遺産としての価値も、まさしく、その点にある。冷温帯気候の樹種であるブナは降雪との相性が良く、白山山地も周辺は豪雪地帯だ。

著者は、「白山山地周辺の地域社会のメカニズムとして、雪と縄文とブナが基層にある」ことを踏まえ、「地域社会の再生発展を考えるにしても、不即不離の関係にあるこの三点セットは軽視できない」と指摘する。

東アジアを代表する自然として、その普遍的価値が世界的に貴重なものと認められた白山山地には、北半球の冷温帯気候を代表する樹種であるブナを主体とした森が、寸断されることなく世界で最も広い面積で現存している。数多くの動植物が幾千年にもわたって自然の生態秩序とともに生き続けているが、その一方で、かつて棲息していたカワウソやオオカミはすでに姿を消し、ダムが築かれた川では、イワナやヤマメ、アメマス、サクラマス、アユなどが遡上できないという現実もある。自然の生態秩序が健全な状態で機能しているわけではなく、より健全な生態秩序を回復させるためには人間の努力が求められており、「優れた自然環境は健全なる社会の基盤をなすものとして、再生復元させることは今後の政治課題」と著者は訴えている。

伐採されようとしていたブナ林の保護・保全を

訴えた市民運動が、世界遺産という形に結実して十八年。その運動を支えた「よりよい自然環境の維持と地域振興は相反するものではなく両者は同一方向に位置する」という理念は、社会経済情勢の変化により、時間の経過とともに説得力を増してきた。

自然を守ることは動植物の生命を守るだけにとどまらず、自然とともに共存してきた人と文化にも想像力を働かせるということでもある。

「白山山地を地域振興に活用する、それが私たちが世界遺産に対応、呼応することである」と強調する著者は、地域社会におけるブナの植栽を提案して、次のように記している。

「西日本の社会ではクスノキの街路樹が一般的である。これは照葉樹林帯としての適地適木の原則に照らして理の当然である。さしずめブナ帯ではブナであり、世界遺産のブナの自然を観光文化の目玉にしようとする地域社会にあつては、もはや論を待たない」

市民の居住地域でそれが実現すれば、観光文化の面から見ても、名実ともに世界で唯一の個性的な地域社会が形成され、自然環境の再生・復元は市民の意識を変革する可能性もたらず。

著者は、そうした展開こそが、白山山地の世界遺産登録を実現したブナ林伐採林道建設反対運動を支えていた理念の「最終到達点だ」と結んでいる。

（挑全）

財団法人 日本交通公社 出版物のご案内

●地域のどろどろに学ぶインバウンド推進のツボ

数多くの地域がインバウンドを推進するなか、外国人旅行者の誘客をめぐる激しい地域間競争を勝ち抜くのは、簡単なことではありません。地域特性や強みを徹底的に磨き上げることで他地域との差別化を図り、旅先としての価値を高めている地域、すなわち”とがった”何かを持ち合わせている地域でなければ、その存在は埋没してしまいます。本書はこうした点を踏まえ、規模や立地、資源などの面ですれぞれ異なる特徴を持った六つの地域の”とがった”を紹介し、そこから見える、地域によるインバウンド推進の”ツボ”を明らかにしようとする試みです。二〇一二年五月発行。



●Market Insight 2011 (日本人海外旅行市場の動向) 最新刊

日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。二〇一〇年の最新市場動向をカバー。当財団の独自調査を基に、変化の下の働く中・長期的ダイナミズムを明らかにしています。日本語版、英語版あり。二〇一二年七月発行。



●旅行年報 2011 最新刊

直近一年間の旅行・観光市場にまつわるあらゆる出来事について、数多くのデータ・資料を基に分析。日本人の国内・海外旅行、外国人の訪日旅行、観光産業国内観光地、観光政策など、さまざまな角度から旅行・観光市場の現状を一望できる一冊。二〇一二年九月発行。



●旅行者動向 2011 最新刊

最新の旅行の実態や旅行者の意識に関する全国アンケート調査結果を、当財団独自の切り口で分析、グラフや図表を多用して分かりやすく解説。二〇一二年十一月発行。



※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。

担当：財団法人日本交通公社 観光文化事業部

電話 03・52255・6073 <http://www.jtb.or.jp>

次号予告

●昨年三月十二日、東日本大震災の翌日に全線開通した九州新幹線。開通により、九州全体の経済的な波及効果が期待されています。次号特集は、九州各地のツーリズムを通じた地域活性化の視点から、九州新幹線全線開通の影響および今後を展望します。

研究調査たより

●新潟県糸魚川市は、わが国初の世界ジオパーク認定地域の一つです。今年度、この糸魚川ジオパークを舞台にした着地型旅行商品開発に、地元宿泊・交通事業者、商業、まちづくり団体、行政等、幅広い関係者とともに取り組んでいます。この事業の一環で、五つの色(赤・緑・黄・白・黒)をテーマにしたフォトコンテストを行ったところ、断崖絶壁の山や美しい紅葉といった自然景観のみならず、迫力あるセメント工場の夜景や雪降るなかの楽しそうなお祭りの様子など、糸魚川の産業の営みや暮らしの風景を写し出す写真も数多く寄せられました。

●「ジオ(GEO)＝地球・大地」ですから、フォッサマグナをはじめとする珍しい地質や地形、鉱物のみを旅のテーマとして考えがちです。しかし、ジオパークの考え方は、そうした大地の上で営まれている生活文化もジオパークの魅力に含まれ、保全だけでなく教育・ツーリズムに活用することが求められています。わが国では日本ジオパーク委員会によって二十地域が日本ジオパークに認定されています(二〇一二年九月現在)。二〇一二年には、新たに室戸(高知県)がわが国で五番目の世界ジオパークに認定され、徐々に認知度が高まることも期待されます。

●全国各地で着地型旅行商品づくりが進められています。その魅力・情報がお客さまへ伝わらないことが、各地に共通の課題。糸魚川では、その魅力を伝える手段の一つとして、写真の力を借りようとしています。(片桐)

編集後記

●日本の国土の六割以上を占める森林は日本人の生活文化に影響を及ぼしてきた。森と共生しながら生活する長い歴史のなかで、森と人が関わる物語が多くあり、人々の生活・地域文化、観光文化を織り成してきた。昨年三月の東日本大震災はやはりわれわれにとって大きな転換点となった。多くの人が森から離れて人工物で成り立つ都市文明のなかで暮らしているが、自然の一部である森の存在や価値が見直されている。人々は森からの糧材を利用して生活していたが、森から離れて生活しているうちに森との共生を忘れてしまった。森を守り育てること、森の持つパワーを利用して精神的な豊かさを取り戻すことなどが、今や期待されてきている。森との共生関係が人間や地域の関係にどのように作用し、コミュニティづくり、人の交流、観光・ツーリズムにつながるかについて探った。森が育む文化や人と森との本来的な関係を実際に体感し経験できる観光・ツーリズムに可能性があることを確認できた。

●当財団が積極的に関与する事業の「白神山地の恵みを活かすエコツーリズムの推進」を特集として、「三陸の観光復興」岩手県田野畑村の取り組み(3)を研究ノートとして掲載した。

●昨年九月二十五日にケニアの元環境副大臣ワンガリ・マタイ女史が亡くなった。グリーンベルト運動で、ケニアはじめアフリカで生活基盤を支える林、森の育成によって人々(近くの木を探り尽くしてしまう)が女性性は毎日遠くへ薪料としての薪を拾い集めに行かなければならぬ)の暮らしをよくする活動を広げる努力をされた。二〇〇五年にナイロビ郊外の荒原で植樹を経験したが、荒野に林や森をつくるのがいかに大変なことを痛感した。人と人との関係を改善し、良好なコミュニティ形成として相互交流を生み出す森づくりの尽力されたマタイ女史の勇気と志に敬意を表するとともに、冥福をお祈りする。

●今年も「観光の底力」をキーワードとして、地域振興において観光・ツーリズムが果たせる役割や可能性について考えます。

●昨年十二月末に事務所移転。新しい住所、電話番号は裏表紙をご覧ください。(片桐)



観光文化 第211号

第36巻1号通巻第211号

発行日：2012年1月20日



発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区大手町2-6-1
朝日生命大手町ビル17F
〒100-0004 ☎03-5255-6071
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区大手町2-6-1
朝日生命大手町ビル17F 観光文化事業部内
〒100-0004 ☎03-5255-6090
<http://www.jtb.or.jp/publishing/>

編集人：片桐美徳

発行人：志賀典人



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載